
次期国王花嫁候補の超絶美形な姉を持った極平凡な妹の巻き込まれ話。

緋汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次期国王花嫁候補の超絶美形な姉を持った極平凡な妹の巻き込まれ話。

【Nコード】

N2603N

【作者名】

緋汐

【あらすじ】

題名通りにいっちゃう感じな正直脇役主人公。

次期国王花嫁候補の超絶美形な姉を持ったアカシエ（通称シェイ）は何故か姉の希望で共に城へとレッツラゴー。

欠いた常識と性格と口の悪さでとりあえず突き進め！
になるはず。

何事も序盤から。（前書き）

著作権は作者にあります。

また、知識が曖昧なので間違ったものがあれば知らせて頂くとありがたいです。

飽き性なので途中グダグダになら・・・ないよう努力します！
宜しければお付き合い下さい。

何事も序盤から。

私の姉は、身内の自分が言うのも何だか変だが、美人だ。しかもかなり。

少なくとも、過去に百の男を手玉に取ったというノイさんよりも隣国の余りの美しさに求婚の書状が馬鹿でかい倉庫をみっちりと埋めてしまったというハースイ様よりも。

・・・いや。彼女達も凄いのだが、姉はそれ以上だという事。

言い寄ってくる奴やら求婚やらで忙しい。最悪なのは、どこぞの坊ちゃんが権力を使って手に入れようとする事。・・・勿論、阻止したが。

ただある問題点としたら、姉は男が嫌いすぎて嫌いの境地を軽々と飛び越し、その目に認識されるのは女性だけだ。男性は全て害虫に見えるらしい。

もう一つは、姉が我が道を行く人だという事だ。こう言ってしまうば聞こえが良いが、つまりは性格に難あり。誰も気付かない。思い込みって恐ろしい。

さらっさらの金色の髪に、吸い込まれそうな瞳（求婚者談）、無駄に長い睫毛と紅も塗ってないのに赤く微笑む唇。すらり高い鼻。小顔。しろい肌に長い手足、清楚な印象を受ける顔に比べ、豊満な体。（理不尽だ）

そして・・・、

「ねえシエイちゃん。朝、私のベットに可愛らしいカナブンが入ってたんだけど、シエイちゃんの仕業？」

あああああああああつ！！ 声も良いよおおおおおうつつ！
！！ 声フェチではないぞ。断じて違うからな！

身内じゃなかったら絶対にどんな方法を使ってもその声を手に入れて常に聞き続けるのに。ああ、惜しいことした！

「シェイちゃんシェイちゃん。聞こえてるから。変態？ シェイちゃんって変態よね？」

「失礼だなあ、お姉ちゃん。私はお姉ちゃんにこそ言いたいんだけど。」

「やだな、ふふふ。いつの間に冗談が上手くなったの？ 大して面白くないからその口閉じててくれる？」

「冗談？ 冗談に聞こえるならその人工っぽい無駄に綺麗な形をした耳もとうとうイかれたんじゃない？ 残念だったねー。」

「大丈夫よ正常だから。少なくともシェイちゃんのトチ狂った頭より。」

「うふふふふ。」

「あははははは。」

微笑み合う姉妹。言っておくが別に仲が悪い訳ではない。むしろ良いほうだ。

私は姉が大好きだし、姉は分かりにくいシスコンだ。若干ツンデレ要素の入った。

何時からだったか、私たちは互いに全力で口喧嘩出来る相手が居ない事に気付いた。だって今で只の挨拶だ。

勝手に嫌味やらが出てくるどうしようもない口を、私たちは互いに二人で発散している。そのせいか私たち姉妹は仲が悪いと噂に成ってしまった。逆なのになー。

変な所が似てるのだ。

「よし、じゃあお店出そう。」

「はいよー。じゃあ私、表回ってくる。」

両親の居ない二人姉妹で経営する小さな飲食店。

まあ、姉のお陰で大繁盛なんだけど。お客の6割が男性だから。表へと続くドアを開けた所だった。

「っと……。あ、お客さんですか？ 開店はもう少し後ですよ。」
誰だろうか。身なりの良いオッサン……。 (ごほん、)。て。あれ。待て。何かこの人制服着てない？ これってあれではないだろうか。

ほら。庶民には縁の無き……、

「早朝から失礼致します。わたくし、城からの使者です。正式な書状もございます。」

「はあ……。」

正直煌びやかな紙切れを見ても、本物がどうかなんて私には分からないのですが。……何か悪いことしたっけ。

考えても姉のプリンをこっそり食べたことしか思い浮かばない。

「えと、それで？ 城からの正式な使者とやらが一体何の用です？」

「はい。実はですね。こちらにお住まいでいらっしゃるリアーナ・スー・ラウディ様に殿下の花嫁候補としてお城へ上がって頂きたいのです。」

……。

庶民だとか、過去にそんなことあったっけとか、あの美貌はどこまでも通用するのかとか。

取りあえずごちゃごちゃしたものは一気に吹っ飛んで。

「お姉ちゃああああああん！！！！！！ 面倒事だよおおおおお
おおおおおっ！！！！！！！！！！」

次の瞬間私は大声で叫びながら家へと入った。

美形な両親の間に生まれ、且つ超絶な美女なる姉をもった平凡なじいちゃんに似て平凡なる私（口悪いけど）。

アカシエ・スー・ラウディ。

姉リアーナ・スー・ラウディが次期国王陛下のラヴェンツ殿下の花嫁候補となるっばいです。

どーすんだおいおい。面食いか、次期国王！！

何事も序盤から。（後書き）

なんでしょう・・・。

口悪いです。主人公。基本。なるべく押さえますが。

誰にだって選択権があるはずだ。(前書き)

作者学校始まりました。

あ・・・、眠い・・・。

誰にだって選択権があるはずだ。

「ざっけんじゃないわよっ！！！」

一先ず簡潔に言おう。姉は使者さんを殴り飛ばした。

「おおおお姉ちゃん！ 一応老人なんだから、もうちょっとフレンドリーな感じで殴らないと駄目じゃない！」

「うっさいわよ！ 城へ行けだど！？ 花嫁！？ 冗談じゃないわ！」

まあ、姉の性格からしてそうだろう。というかぶっちゃけこの人の花嫁姿が想像出来ない、私。国王のことハエ叩きでぶん殴りそうだし、あれ。そうなら打ちく……いやいや。不吉な事は考えない様にしよう。胃に穴が開く。

「し、しかし。これは正式な……」

「正式だから何！？ 私の道を邪魔する奴は許さないわよ！」

怖い。執念深い姉のことだから、復讐となれば何でもしそうだ。ドンマイ殿下。

焦った使者さんは何とか怒りを静めようと喋り出す。

「で、殿下はその、女性嫌いな面もありましてこれまで貴族の花嫁候補であつたご令嬢方を尽くつていらつしゃいますので、候補と言いましても城へ上がれば次期王妃の様なものでございます。」

「それで？ 次期王妃が何な訳？ 私庶民でしよう関係無いじゃない。」

「す、少しでも殿下が女性に興味を持つてくださる様、美しい未婚の若い女性たちを中心に選ぼうとなりました、ラウディ様はそれは美しい事から……」

「それって全て殿下の利点じゃない。私が城へ上がった場合の利点は何？」

「はっ。まずお暮らしが豊かになり、続いて財産は……」

「やらせて頂きますわ。」

あれ口調が戻った・・・って、え？

「おおおおお姉ちゃん！！？ お金！？ お金なの！？」

世の中もつと大切なことがあるはずだよ！ 第一お店とか私はどうするの！？

心の声が聞こえたのか、姉は眉を歪めた。なのに様になるって腹が立つ。

「そうでしたわ、私どうしても置いて行けない大切な・・・、だから、城へ上がるのはやはり無理ですわね。」

「いえ。基本的にご自宅からお荷物は一つだけ持っていていつでも大丈夫です。」

「まあそうでしたか。ありがたいですわ。では、城へお伝えください。」

とんとん拍子。

そろもつあつという間に話が進んだ。噂やら準備やら警護やらで周りが騒がしくなって。

そして何故か気付いたら・・・というか姉が城へ上がってしまう日の朝目覚めたら。

顔だけ出した状態のまま袋に体を包まれて馬鹿でかい城の前に居た。

「・・・・・・・・お姉ちゃん。」

「あら起きたのシェイちゃん。お早う。」

「何で私も城の前に居る訳？」

「え？ だって使者さん言ってたじゃない。荷物は一つだけ持っていていい、って。」

「あー、うん。言ってたね。・・・で？」

「だから、

シェイちゃん持ってきた」

・・・・・・。

私荷物かよ？

誰にだって選択権があるはずだ。(後書き)

アカシエは所謂ミノムシ状態です。
手足も拘束中。

ちなみにアカシエとリアテーナは3歳差。

シエイ↓18

リーテ↓21

一目惚れなんだって。(前書き)

リアテーナの愛称がリーテなのですが、
未だにここできしか出せてない。下手したら出ないかも。

一目惚れなんだって。

「お姉ちゃん」

「なあにシエイちゃん。」

「人一杯居るね。」

「そうね。」

つまり。物凄く視線を感じます。次元が違う美形なる姉に。そして・・・ミノムシ状態の私に。

まあいいよ。もういいから。ここまで来たんだからいつそ貫き通してやるわ。何で誰も助けてくれない上にスルーしようとするんだよ。意味が分からない。頼むからさっさと中の縄解いて。

さっきまでは広いホールの様な所に居た。姿は見えなかったけど（転がされてたから）国王との挨拶が終わったらしい。よく考えれば権力者の前ですごい失礼だったのではないだろうか私。そもそもきちんとして認識されていたかも危うい。空気として扱われていたから。あれ、涙が。

廊下を歩く侍女さんや役人さん（多分）は皆、男女問わず姉を見てから顔を赤らめ目を逸らし、その手に抱えられている私を見て何か見てはいけない物体Xを見てしまったとも言つようにまた目を逸らす。

一度目と二度目では大分意味が違う気がするのだが気にしないでおこう。

気にしたら私の中の何かが崩れる。確実に崩れる。

ゆらゆらと抱えられている振動に眠気を誘われていると、ガクンと衝撃が来た。

「い・・・っ、たっ・・・!」

ちよ、おいおいおい。人の腰の高さから落とされたら全身を打つんですけど。

まずいこれはさすがにまずいだろう。

ズカズカと歩み寄る姉を全力で阻止する内に、会話が聞こえる距離まで来た。いいのこれ？ 盗聴？ 盗み聞き？

「では、地方の。」

「ああ———した場合のみ。」

「分かりました、殿下。」

h ?

「……お姉ちゃん、今あの人殿下って呼ばれたような……」

「……殿下って、この国に一人よね？」

「……あの人、お姉ちゃんの婚約者じゃん。」

7
 •
 •
 •
 ○
 7

7
 •
 •
 •
 ○
 8

「やったわっ!!!」

「わーおめでとー（棒読み）。でも確か殿下ってお姉ちゃんなんか眼中に無いんじゃないっけ？」

あ。

「いいいいいのよっ！　これから、これから仲良く親しくなるんだからああーっ！」

すごい。姉の涙目を初めて見た。

走り去る後姿も美しい。

私の一言が姉にかなりの致命傷を与えていたのだと知るのは、後のこと。

・・・なんかごめん。

取りあえず。

姉が恋をしました。

一目惚れなんだって。（後書き）

鬼の目にも涙。

今回はアカシエを主に姉の登場は無いはずだったんだけどなー。
予定までも狂わせるのか姉。

恋により獣化注意。(前書き)

あ、やっとこいつ出せた・・・。

恋により獣化注意。

姉は恋をしてから殿下を追っかけまわす様になった。

正直見ていて面白い。むしろ噴出す。顔を赤らめ乙女の表情をしながら目目は完全に肉食獣の姉と、顔色を悪くしながら真剣に全力で走る殿下。殿下は毎回上手く撒いて隠れているようだけれど、姉の恋する乙女リーダーの方が一步上手だ。地下だろうと屋根の上だろうと見つけ出す。

私は殿下の立場にだけは成りたくないと思う。

「ラヴェンツ様あああああつ！ 待ってくださいいいいい！！」

「……………」

ああ叫んでる叫んでる。私は姉の恋を応援しているから、どんなに殿下が哀れであろうと助けることは出来ない。うーん。でもあの恐ろしい間に入れる人などいるのだろうか。

そう思って、城の屋根から降りかけた時だった。

「ラウディ殿。その辺でやめてあげて下さい。殿下はこの後も執務が溜まっています。こちらとしては迷惑です。」

・・・何だあの藍髪。

姉は殿下に影響することで責められると全く言い返せない上に涙目になる。殿下に関して言われると弱いのだ、天下の口女王も。

「だ、だから私が作ったりんごのスープを差し上げようと・・・」
私は姉が昨日、厨房を借りてまで何かを作ったことは知っている。知って、嬉しくなったのだ。殿下が喜んで飲んでくれればいいとまで願う程（この私が）。りんごのスープは、私たち姉妹二人のうちどちらかが具合が悪くなったり、疲れが溜まっていたりするともう片方が作ってあげるものだ。良くなるように、頑張つてね、と思うながら。

「りんごのスープ？ 毒が入ってるか分からぬものを、殿下に飲ませられる訳が無いでしょう。」

「入ってませんわ！ただ、疲れが取れるようにと……」

「それならば心配は無用です。厨房が作ってますので。むしろ、少ない休憩時間にこう追いかける方が疲れるのでは？」

「おい、ラークス……」

益々涙目になる姉。・ ・ ・ 姉が泣くのが、どれ程のことか全く分からない癖に！

あの藍髪は更にため息をついたのだ！

何だあいつふざけるな感じ悪い上に性格まで悪いのか！！！！

で。我に返った時は。

飛び降りてた。藍髪の、

頭上に。

「つ！！？」

[illegible]

ド
ン
ッ
！

「シェイちゃん!？」

「ラークス！」

い、痛い。予想以上に痛かった。あれでも上の私でこれだけ痛いっ

てことは・・・下はもつと痛いのか。・・・ま、いつか。

「っ、何だお前！」

「はっ、そっちこそ何な訳？ さっきから聞いてりやぐちぐちよくもまああんだだけ喋れたものね！ 恋愛は本人同士の問題なんだからアンタ一人の判断で片付けないでくれる！？ 私の姉が恋する相手に毒を入れるなど・・・侮辱した罰よざまあ見ろ！」

言った！ 言ってやったああすつきり！ 姉が横で珍しく感動してる。

「ぐちぐち喋ってんのはお前だろうが！ この糞女の妹は人の頭の上に飛び込んでくる程常識の無いそれ以上の糞女のようなな！」

「自分の価値を理解してから人を判断してくれない！？ あんたなんかその糞以下だってこと、分らないの！？」

「その狂った判断基準を治してから出直してこい！ 大体、どけ！ お前女のくせに随分重いな！」

「あーら。女性を重いと言うだなんて、ジェントルマンとやらからは程遠いようね！ あんたこそ城に仕えてる人間らしいけど、ド汚い言葉遣いで良いのかしら？」

「お前のような奴を女性と認識する必要はない！ よく自分のことを言えたもんだな！」

「ふん、あんたなんかまず人間から除外よ！」

「・・・ま、まあまあ。二人とも落ち着いて。喧嘩する程仲が良い、つてのはよく分かったから。」

「っ、よく ない！！」

ハモった。ああ、腹が立つ！

「お姉ちゃん！ この礼儀というものがそのまま欠陥している失礼人間は、一体何なの！？」

「ラヴェンツさまの側近の一人、ラークス殿よ。」

側近

そっきん

ソッ
キン

あれ。私、
体当たりして良
かったの？

恋により獣化注意。(後書き)

言い合いが楽しかった・・・

評価？ 安心して、最悪よ。

第一印象という言葉がある。そしてそれは、大抵当たっているのだ。ソッキンくん・・・、いや、敬意など微塵も表す必要が無いのでソッキンと呼ぼう。むしろ呼んでやろう。

ソッキンソッキンソッキンザッキンザッキンザッキンザッキンソッキンザッキンザッキ・・・ん？

何処か変な気がするけど、気にしない気にしない。

「おい、ザッキン！」

「誰が雑菌だっ！！！」

物凄い顔で振り向いたザッキンは、唾を飛ばす勢いで怒鳴ってきた。耳が痛い。あと汚い。顔が真っ赤ですよー、んー？ 血圧が上がったんですかー？

「どこ行くの？ いい加減、腕が痺れてきたんだけど。」
そう。

本当にそれはもう心から意味が分からないのだが、私は今こいつの書類運びの手伝いをしている。腰から肩まである程の高さのものを、2人分。それはもう重い重い。ザッキンと私の量が同じなところが、何と言うか、気遣いの無い奴だと思う。ここは普通私の半分を持つてくれる場面ではないのだろうか。そして街の漫画では私がキュンツと成って照れながら、

「あ、ありがと・・・」

「・・・別に。女子って、力無えのな。」

そう言いながら恋が始まって・・・

・・・。。。。。。

ああああああああああああああっ！！！！！！！！

無い無い無い無い！！

妄想ってタダだから暴走したけど、よく考えれば相手がザッキン！

あり得ない！

恐る恐る腕を見ると、バツチリ鳥肌がたっていた。何て言うか・・・私って正直だと思う。

「・・・何処行ってくつて、聞いてなかったのか？ さっき言っただろさすが単細胞。」

「え？ 何か言った？ ごめんね私、虫の鳴き声は聞かない主義なの。」

「・・・。殿下の執務室だ。これは全て、殿下のサインが必要でな

ー
げえ。これ全部に書くのか。大変なんだな殿下つて。私王族じゃなくて良かったー。

ああ、そうだ。

まず説明が必要だった。

ザッキンに体当たりしたことにより、牢には入れられなかったのだ
が与えられた処罰が

こいつの仕事（？）の補佐だ。

ああ、後悔。

評価？ 安心して、最悪よ。（後書き）

犬猿の仲？

全力で漬せるって、いい。(前書き)

あれ・・・何か進みが遅いですね・・・。
何でだろう。あれかな。嫌味が楽しすぎてついつい・・・

全力で潰せるって、いい。

ドアを開けると、まあ予想通りというか何と云うか・・・、姉が居座っていた。想像出来すぎていたので、私はリアクションせず。なんだけど、

「で、殿下！ スパイかも分からぬような女を、大事な書類があるこの部屋に・・・」

「ラークス。あのね、リーテは仮にも俺の婚約者だから。」
「・・・あ、あれ・・・？」

気付いた。私は気付いた。そして横の無駄に姉を敵視しているザッキンも気付いたらしい。口が開いている、それはそれはもうポカんと。

いち。いつの間にか愛称になってる。何かあったのか？

に。かばった！ 前まで傍観してるだけだったのに、かばった！
何かあったのか！？

さん。「婚約者」って言った！ 「婚約者」！ 認めなかったのに今までむしろ邪険に扱ってたのに近寄られるのも嫌そうだったのに最初は！・・・何かあったのか！！？

「いいですよラヴェンツ様。虫けらの言うことなど、屁ではありませんわ。それにしてもラークス殿、シェイちゃんにそんなに持たせるだなんて気を遣うという言葉が貴方の辞書には無いのですね？」
おお、言った。屁ではないだなんて言ってるけど、色々と涙目になつていたのは誰ですか。何かあったのか正直物凄く聞きたいし、興味津々なんだけど我慢する。分かったこと。復活すると口も元に戻るんだ。

まあ珍しく容赦なく全力を出して（しかも私たち二人で）良い相手が居るので私も参加しよう。

「本当、まず頭の中に辞書というものが存在しないんじゃない？
色々ーから学ぶのに単語帳必要でしょう、私が小さい頃に使ってた

のがあるけど、仕方ないからあげようか？」

ついでににつこり笑って上に書類全て重ねてやった。

崩れるかと思ったけど、耐えたみたいだ。筋肉がピクピクしている。

「あ、阿呆に貰うものなど何も無いわ……！」

凄じ捨て台詞っぽい。負け犬っぽい。……何ていうか、歩き方が鍛えた人でもさすがに二倍は重かったのか。

部屋を出た後で、一応聞く。

「ねえ、ザッキン。どうしてそんなにお姉ちゃんが嫌なの？」

……。……。……。も、もしかして。

「お姉ちゃんに……。報われぬ恋をしているのか……。」

「違うわ阿呆！」

うんうん。否定しなきゃいけないよね。だって自分の主の婚約者だしね。姉の美貌を見て揺らがない方がむしろ珍しいよ。

「そっか……。辛いんだね、うん。でもごめん。私はお姉ちゃんの気持ち優先だから……。」

「お前の耳は飾りなのか!？」

「駄目だなザッキン。それ、定番だから。」

嫌味として。

一つ。

ザッキンでも姉に恋をした様です。
むしろザッキンの癖に、

全力で潰せるって、いい。(後書き)

違います。

乙女への禁句と危険。(前書き)

変だな。ラークスはクールキャラ目指してたんだけどな。
何故か無神経若干弄られキャラに・・・。

乙女への禁句と危険。

「臭い。」

「は？」

「だから臭いぞお前。」

・・・心底この男はあり得ないと思う。

私の城での立場は正直微妙だ。姉の荷物 兼 ザッキンの補佐役。ザッキンの方は、監視も兼ねているのだろうかと最近気付き始めたが。

姉は一応殿下の婚約者（＝未来の王妃）だし、ザッキンは雑菌でも殿下の側近だ。周りに居る人の立場が凄いだけで、正直私の立場はただの一般市民。むしろ下町の小娘。色々価値皆無。

姉の私物だし、でも小娘だしで与えられた城での生活場所が侍女さん達が寝泊りする所。その中でちよつとだけ良い部屋が与えられた。・・真面目に働いてる人に申し訳ないのだけれど。

だから色々価値皆無なんだって。本当に無いんだって。微塵も無いんだってば。

・・・特に政治的価値だなんて。

「はああ？ シエイちゃんを利用しようとする、もしくは狙っている奴等が居るですって！？」

ああとばかり。これ以上のとばかりがあるだろうか。

「みたいだね。そう取って間違いないんじゃないかな。リーテは未来の王妃、だから。アカシエちゃんを使ってリーテに接触、あわよくば俺に。もしくはリーテの弱味になると踏んで、アカシエちゃんを囲んで脅してあわよくば俺にまで。そのどちらかじゃないかな。」

つまりあつれー？ 良いパイプ役になりそうじゃね？ って事です

か。あれか。お前には興味無えんだよ。そのバックに用があんだよ、ってか。

・ ・ ・ 何だろうこの小物感。値踏みされて激安セールに売られた感じ。あれ。ちょっと違うか。

「でも何でお姉ちゃんの弱味握る必要があるんですか？
っていうか正直私弱味になります？」

「なるだろうな。唯一の身内なら使えると考えたんじゃないか。」

「誰が？」

「ラウディ殿王妃反対派が。」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

えええええええええええ。

「聞いてない！聞いてないよ何それそんなん居るの！？」

「今更ねシェイちゃん。城へ来てもうすぐ一ヶ月になるわよ？ 見

「てりや分かるでしょう。」

いやいやいや。分かりません。ってか考えてませんでしたその辺のドロドロどうでも良かったんで。

でもよく考えて、客觀的に見ればそうだよな。私だって使者さんが家に来たとき一瞬そう思ったもんな。普通の街娘の一般市民がいの？　って。

そういえばあの殴られた使者さんは頬大丈夫だったんだらうか。

「主に意見は二つあつてな。ちゃんとしたどつかの国の姫さんを無理やりにも娶つて王妃にしよう派と、もうここまで来りゃあ誰でも良いから殿下に結婚して貰おう派。」

・・・普通は前者なのではないだろうか。あ。でも殿下女性フリ続けたんだっけ。そこまで躍起になる人が出てくる程。

「そうそう。で、後者の奴等が先手必勝って言って半ば押し切ってリーテの所に行ったんだよね。」

「まあそうです。聞く限りその方々が阿呆だとは思いますが、ラヴェンツと出会えたのは感謝しなければいけませんね。」

「同意。だから俺は後者に味方。」

・・・あれ。ピンクの雰囲気か。

ザッキン辛くないのかなと顔を見たらもの凄く呆れた目で見てた。あれ。そこはシヨック受けても我慢して、っていう・・・でも身内のいちやいちは意外と堪えるな。物凄く出て行きたい。そして見なかった事にしたい。超絶美形と美形だから、中々絵にはなるんだが。

「・・・で、あの。お二人さん。話の続き。」

何があつたかもう知りたくもないが、こいつ等日に日に仲良くなつてやがる。

「あら、そうだったわ。で？ ラークス、シェイちゃんが狙われてる（もう決定）っていうのは、どうして分かったの？」

「臭かつたんで。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

何度聞いてもあり得ない。だからもつと表現を和らげて。和らげてもこいつは女性にモテないだろうが。

「は？」

「・・・・・・・・はい？」

「徐々に鼻が慣らされて、本人は気付かないのですが相手がある程度いい様に操る時に使う、催眠の効果を持つ特殊な香水の香りでしたので。」

ほら最初からそう言えこの馬鹿め。

「・・・・・・・・まあ、虫けらの癖に鼻だけは犬並みだったのね。」

「へえ、そうだったの。それ殆ど無臭に近いのによく気付いたね。まるで犬みたいだね。」

褒めてる褒めてる。これでも褒めてる。殿下、最後のは無意識か。

「その香水を使ってあつたのは部屋からです。臭いの元は取り除きました。」

臭いって言ったか？ 臭いって。漢字変換が見えたぞ。匂いと言えよせめてそれを体に纏わせてた本人の前だけでも。

「うーん。アカシエちゃんと接触したいのかな。城下に帰しても、ねえ・・・」

「嫌よ。」

「今更一人で生きていけと言うのですかこんなか弱い娘に殿下。」

「いや、帰るのなら一応お金は渡すんだけどね。侍女塔に居てもわざわざ仕掛けられるなら何だかんだで帰っても利用されるんじゃないかな。」

「・・・えええ。」

「だからもう少しいい部屋へ移ってみようか。そしたらその部屋に仕掛けられる人も限られてくるしね。」

「やっほーいっ！ いい部屋いい部屋！」

あれでもそれって政治的価値が多少なりともあるって宣言してるよ
うなものじゃ

「で、殿下・・・？」

「頑張つてね、アカシエちゃん。リーテと俺の為に。」

無理しなくていいのよ、そう言った姉の声が遠くで聞こえました。

乙女への禁句と危険。(後書き)

でーんーかー！。

殿下基本他人興味ありませんが、大事な人との事になると手段選びません。色々。

思い出はトラウマと読む。(前書き)

不快に思われる方がいらっしやるかもしれません。
内容的に色々。(いや大丈夫か?)

主人公崩壊してます、キャラがキャラが。

思い出はトラウマと読む。

思えばそうだった。姉が私にくれた最初の誕生日プレゼントは、『つまらない？ 日常を打破 リーテがシェイちゃんに非日常を経験して貰う！ きつと楽しいよ』期間は一週間……だった。ピンクの折り紙にだらだらと幼さが残る文字で書かれてあった。その時姉は確か14歳。私11歳。

無垢だった。自分で言うけど私は純粋な少女だった。賞賛も賛美も、人々のそれは姉にいったけれど。同時に嫉妬や妬み。怨み。普通は私にも漏れたであろう人々の黒い感情を、姉は全て受け止めた。私に少しも漏らさず。

若干人と違う思考回路を持った姉が居るという認識がその時には無かった。具体的に言えば、「打破」の意味も「非日常」とやらがどういうものかさえもいまい良く分かっていなかった。

……それでも。生まれて初めて貰うプレゼントと、誕生日を「祝う」という概念を知った私は他の事がどうでも良くなっていた。先に言おう。姉はシスコンである。決して嫌がらせの類ではない。

一日目。朝起きたら何故か草原に居た。右も左も分らず泣きながら一日掛けて家に帰った。

二日目。起きたら何故か一緒にタコが寝ていた。勿体無いので夕飯になった。

三日目。姉が記憶喪失になったことが発覚。焦って悲しくて、ずっとどれだけ姉が大好きかを語り続けた。泣きながら本人に。語り終えた時点で嘘だと判明。

四日目。もしかこれが非日常とやらなのか姉に問い詰め、やめて欲しいと土下座。そこを写真で撮られ居間に飾られた。今もある。

五日目。外に出たら何かされると部屋に閉じこもる。その日だけ何もあらず、閉じこもっただけで終わった。喪失感。畏か。

六日目。本屋へ行こうと玄関に向かった所で眠気に襲われ倒れる。

そういえば朝食の水が変わった味がしていた。起きたら外暗し。七日目。誕生日当日。これでやっと終わると安心。感じるのは歓喜のみ。ワンピースを貰いご馳走を食べ終わり良ければ全て良し。布団に潜り込んだ所で。

黒尽くめの奴等に何故か狙われる。勿論姉の仕業。

「お姉ちゃん！ お姉ちゃんは・私の事・嫌いだったの！？」
「え？ 何言ってるのシェイチちゃんたら。この一週間で色んな人の立場を味わえたでしょ？ 最後のが狙われる権力者の立場だっただけよ」

変わらぬ美しい笑顔で笑った。「それにシェイちゃん中々強いから倒せると思って」・・・その言葉に意識が飛んだのは確かだ。つまりは姉の愛情表現なのだ。それが姉にとつての楽しいことだったのだ。それを分かっていたから責められたりはしなかったし、愛されてるなあ、と嬉しく成った程だ。

当時11歳。無垢な私の心境。

現在18歳。

断じて私はマゾでは無い。

「い、いやああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

「ど、どうしたのアカシエちゃん！？ リーテなら兎も角、アカシエちゃんが大声を……！」

「おい五月蠅いぞ。あと此処は執務室だ。」

「いやねラークス。シエイちゃんは貴方などに用はないのよ？ 何を自惚れているの？ シエイちゃんは私に会いに来たに決まってるでしょ。」

「は？ 自惚れって何でお……」

「お姉ちゃああああああああんっ！！！！！！！！」

「ほらね阿呆め。……どうしたの、シエイちゃん？」

「あ、朝起きたら……、

窓からナイフが飛んできたの……！！！！！！」

ピクリと反応した男性陣に比べ、姉はあらと首を傾げただけだった。

「遠距離系の攻撃？ ナイフだなんて大きなもの、すぐ気付かれるでしょう。駄目ねえまだまだ甘いわ。暗殺でもしようとしてるのかしら？ ……いや、脅したいだけね。」

「だよね。……じゃなくて、お姉ちゃん、決してお姉ちゃんが手配した人達じゃないよね……！」

「久しぶりねえ。なあにシエイちゃん？ 非日常を……」

「いえ！ いいです断じていいです本気でいいですすみませんでした！」

「……リーテ。アカシエちゃんのキャラが……。」

「……。」

「手配って？ え、まさかリーテがアカシエちゃん殺そうとかした訳じゃ……」

「もうっ。ラヴェンツつたら。私がシエイちゃんの命を奪おうだなんてあり得ないわ。王族特有のその物騒な考え止めて頂戴ね？」

あ、語尾が優しい。

「じゃあ、手配って・・・」

「単純よ？ 昔にプレゼントの一つとして闇系専門の方々にシェイちゃんを標的として依頼したのよー。ただそんな小さい子が標的しかも少女っていうのは珍しいらしくて。集まった人達がその・・・変態だったのよ。」

あの光景は忘れられない。黒いオジサン達。

簡潔に言えば暗殺者 兼 ロリコン、露出狂、（ピーーーーーー
ー）など。

「だからシェイちゃん変態がトラウマなのよね。」

そうです。てか誰のせいだ元は。

「あー、じゃあ等々はつきりと動き出したと言っ訳かな。あちらさん（姉王妃反対派）、は。」
お願い。

暗殺者向けるなら普通ので。

思い出はトラウマと読む。(後書き)

話が変な方向に向かってます。
不思議)

天使は空の上だと誰が言った。

爽やかな朝。清々しい空気。澄み切った青空に、
わざと開けた窓から飛んでくるナイフ・・・

をキャッチする彼女。

「お早うございます、アカシエ様。」

「お早う、フィノル。今日も見事なキャッチだね。」

いやだ、照れますわとはみかみながら頬を赤くする天使。
天使は空の上に居ると誰が言った。

簡潔に言っと。

侍女が出来ました。

「アカシエちゃん。」

「はい殿下。」

「侍女を付けよう!」

「・・・・・・・・・・・・・・は?」

ごめんなさいお姉ちゃん。殿下は頭が弱いのかと疑ってしまつて。
「よく考えれば今まで掃除も食事を風呂も一人でやってもらってた
よね。」

「だから幾ら狙われているとはいえ、全て一人と云うのは無理があ

ると私が申し上げましたの。」

成る程。分かりやすいコンビの説明、ありがとうございます。

「一応信用出来る者にしたから。で、こちらがその侍女です。」

通されてやってきた子を見た瞬間、私は鼻血を噴いた。

「……………」

周りの白い目とヒいた声など、もう気にもならなかった。私の目は彼女しか映さなかった。っていうかガン見した。

「アカシエ様。お世話をさせて頂きます、フィノルでございます。宜しくお願い致します。」

綺麗に腰を折ると同時に、ふわりと舞い上がるミルクティー色のふわふわの二つに縛った毛。落ち着かせる深緑の色の瞳と目が合い、紅くちょこんとあつた唇が動いた。

「アカシエ様？」

こてん、

くびをかしげた。

「……………!……………」

ああ私の血が！ 生きる源が！ 鮮血が！

声も素晴らしかった。当然の如く、姉の次にランクイン出来るだろう——つまりは二位に。

私はそこらの美形などに揺らがない。というか美形に見えない。周りの反応を見て初めて知るくらいだ。それは誰よりも美しい姉が居るから。免疫がたつぷり付いているのである。

おまけに何故か周りはやたらと美形率が高い。美しいものは、嫌でも目に入ってきた。

……………が。かし。

「可愛い」という言葉が当てはまる人には未だに会ったことが無かった。つまりは免疫力ほぼゼロ。可愛いと言われる人でもそれには何処か美しいものが備わっているからである。

100%、何もかも「可愛い」に当てはまる彼女を初めて見た私は、物凄い勢いで侍女が付くのを承諾していた。

天使。まさに天使。これを天使といわず何を天使と言う。

「よ、宜しく願います！」

「こちらこそ。恐縮です。」

その直後執務室にまで飛んできたナイフを跳ね除け、その勢いでナイフが折れていたのを見た時は思わず明後日の方向を見てしまったけれど。

・・・ティッシュを下さい。

天使は空の上だと誰が言った。(後書き)

短い？

今更ですが、お気に入り登録してくださった方、また読んで下さる方々、
本当に感謝です！

賽を投げるタイミングを教えてくれ。 前編（前書き）

期末という名のラスボスと健闘（？）中だったもので、更新が出来ませんでした。。。（だってこの話書くこと沢山ある）いや、まだ終わってませんけどね？ というよりむしろ今日当日？ほら誰にでもあるじゃないですか！休憩と公言する現実逃避って！（↑

賽を投げるタイミングを覚えてくれ。 前編

「へ？ お姉ちゃんと殿下が正式に婚約発表？」

「そうらしいです。明日、正式に発表なさるようで。」

フィノルが読書タイムに思い出したように言った。いえ、聞いてま
せんって。

「えええー。何で二人とも私に直接教えてくれないのかなあ？ 何
これいじめ？」

「あ、いえ。昨日の晩に決まったそうで。今朝アカシエ様の部屋に
来る前に殿下直々に教えておいてくれと頼まりましたよ。」

「成る程。………今朝？」

「はい、今朝です。」

・…今昼ですよー、フィノルちゃん。基本抜け目無いのに肝心な
所だけたまに忘れる天使。

いいよもう可愛いから。あああ、上目遣いでこっち見ないで！ 可
愛いな本当に私の天使！（決定）

「うーん。じゃあ、今おめでとうって言うてこようかな。フィノル
も行く？」

「あ、いえ！ 駄目です、アカシエ様。殿下とリアーナ様の場合
は婚約を決められたのが昨晚だったので少々例外となりますが、基
本身分の高い方は婚約発表までの三日間人に会わないのがしきたり
です！」

ええええええええええ。なんじゃそら！ なんだその面倒な！ 今
まで身分というものに無縁だったからそういうの全然知らないんで
すけど！

「えええ。じゃあ、朝フィノルが殿下直々にどうのこうのっていう
のは？」

「はい、正確には扉越しに手紙で教えて頂きました。」

ああ成る程。不便っぽいですね殿下。あと姉が大人しく部屋に閉じ

こもる柄では無い様な気もするが考えるのはやめておこう。きっと城の人達が何とかしてくれるだろうから。

「そっか。それにしてもやつと？　っていうのかな。あのラブラブっぷりからしたら即行で婚約発表とかしそうだと思ってただけで一ヶ月半持ったな。」

「お二人とも大変目麗しいので、とても絵になりますよね！」

おお。フィノル、頼上氣してますよ。私の血圧に悪いからやめ……いやもう少し見ておこう。

「まあ、腹立つ位に美形だからねえ。」

「私も殿下とリアテーナ様の様な仲、憧れます……」

………ん？

「いやいやいや。え？　フィノル、恋人とか居る訳じゃないよね？」

「え？　……あ。い、います、よ……」

居ます。います。イマス。i m a s u。……イエス？

「………だあれ？」

滅多に無く、本気でキれた時にしか出さない程の低い声が出ていたのは無意識だ。仕方あるまい。

「え、あ、あの……ラ、ラークス様です！」

呂律が回ってないフィノルも可愛いね（もう変態の域）。ラークスって誰だっけ。てかそんな人居たか？　ラークス？　なんだそのスパーみたいな名前。フィノルはこんなにも愛らしいのに名前すらもショボイのかふふふふ。どうやって始末しよう。雑巾のごとく扱って……雑巾……雑巾……雑菌（側近）………

……ザッキンと天使なるフィノルがこいなか？

目は完全に据わり扉のほうを見つめ怪しげに笑う私に、何か気付いたらしいフィノルが慌てた。

「だだだ駄目ですよアカシエ様！ 変なこと考えないで下さい！」
「変なこと？ いやだな可愛いねフィノル（本音）。ちよつと始末するだけだよ？」

「よ、余計駄目ですよ！ ラークス様が居なくなったら私耐えられませんし、アカシエ様もラークス様はお強いのでお怪我でもされたら大変です！」

上目遣い + 涙目 〃 相乗効果 1・5倍比

「・・・そうだね！ じゃあフィノルが悲しむならやめとこっか！」
（笑顔）

結論↓解決。

（少しシエイの扱いを学んだフィノル）

ザッキンの恋人なら信用できる、という意味だったこと。

ザッキンの補佐役が無くなったのは代わりにフィノルが監視者 兼
侍女（あと護衛）として就いたからだということ。

・・・世の中知らない方が幸せな事が多いです。

あと、姉が（半分）嫁にいきます。

賽を投げるタイミングを教えてくれ。 前編（後書き）

身分の高い婚約しきたり云々は完全に作者の妄想です。

結婚式の場合はありそう・・・？ とか思いましたが、実際に調べてないので知りません。無知ですみません。

そこら辺は話に都合のいい様に設定してあるので、多少の無茶はお気になさらず。

あとフィノルの敬語が慣れてない。

シェイとは多少くだけた設定なのですが、どうなんだフィノルの言葉？

まあいいや。

何か間違いでもあれば教えて下さい〜

それと。

主人公は変態じゃありません。断じてと言えませんが一応違います。

（のはず）

裏話・・・というか作者の気分話。

最初はラークスとアカシェをくっつけるつもりで出したのですが、ヘタレだったのでやめました（酷い）。フィノルとばかりすまん。

——ある姉の自己満足一人話（前書き）

お、終わりました期末・・・！ 涙

ああ長かった、禁欲生活。（フライングしてたけど）

これで更新しても誰にも文句は言われない。

テストに泣かされたけど過去のことには気にしません！（
↑

——ある姉の自己満足一人話。

え？ なあに、ちょっとそのアナタ何こつち見てるの気色悪いわね眼球洗ってから出直しなさい。

・・・あら泣くだなんて。そんな洗い方もあるわね蛆虫並によく考えたわ褒めてあげましょ。

「・・・妹さんが、いらつしやるそうですね。」

そうよ。それがどうしたの？ 知ってるならわざわざ確認する必要も無いでしょ。

「大変似てらつしやらないとか。」

そんなことないわそっくりよ。安易な意見を口に出さないで下さる？

「そ、そうですね。失礼致しました。い、妹さんとの思い出は？」

ぜひ私は貴女の大切な記憶を共用したいです。」

笑わせないで頂戴。アナタはそれでも私は微塵も思っていないわ。

なあに？ 自分勝手な意見を押し付けるのが随分とまあ好きな様ね。

「い、いえ。」

でもそうね妹自慢ならしてやらないこともないわ。私はあの子の事が大好きなのよ。

「おねーたん」

舌がまだ上手く回らないほど幼い頃——同時に私も幼かったのだけれど——あの子はよく私の後を付いて歩いていた。よちよちとてくと。効果音が付きそうな足取りが可愛くて堪らなく、私はいつもあの子を思い切り抱きしめていたの。

「あああ！ もう、なんて可愛らしいのシェイちゃんったら！ そ

うよ、おねーたんねおねーたん。」

「・・・おねーたんっ。」

「ぱあぁ、と笑顔になってぎゅうつと抱きついてくる。妹は持つものね！（その時リーテ6歳）」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・。」

「・・・お、おね、たん・・・」

ぎゅうううと力を入れるうちにあの子の顔はよく青くなっていったのだけれど、未だにその謎は分からないわね。何でだったのかしら？

遊ぶときも一緒、食事もし一緒、お風呂も寝るときも一緒。今考えたらあの頃が一番一緒に居たんじゃないかしら。

日々を過ごす内に——子供の成長は早いものだとは子供の頃に悟ったわ——あの子はどんどん自立して、呂律も回るようになり、足取りもしっかりしてきて、しっかりした子になっていたのよ。

「おねーちゃんっ！」

「あらどうしたのシェイちゃん。」

「どうしたじゃないよ、また私の部屋にイナゴ置きっぱなしにしていったでしょう！」

「すっかり忘れてたわ。ごめんなさいねシェイちゃん。」

その時は確が変わり者のエリデに無理矢理渡されたのよね。「絶対愛したくなるから！」・・・と。確かに見ている内に愛嬌は湧くものの、それ程ではなかったわ。だってそんなものなら私は既に見付けていたもの——可愛らしい妹を。

「もう。持ってくるのはいいけどちゃんと持ち帰ってね？ それとももうまっきなのか？」

「まだまだよシェイちゃん。末期の漢字変換が出来ていないわ。修

行してらっしやい。」

むう、と頬を膨らませるあの子。（当時7歳）

「へーんだ、いいもんね。おねーちゃんの阿呆！」

阿呆は漢字変換出来ていたわ。その事を褒めてあげようと思ったのだけれど、その時はもう既に扉がしまった後だったから。

「お姉ちゃん。」

声に落ち着きが出て、その時はまだ9歳だったのに、あの子はもう大人びていたわ。でもやっぱり幼い所があつて、嫌なことがあると必ず私の部屋に来て眠っていたわ。何があつたかは話そうとしなかつたけれど。

それがある時期から急に増えだしたのよ。殆ど毎夜だったかしら。

「シエイちゃん。」

「・・・・・・・・・・なに。」

「どうしたの？ 何か嫌なことあつたんでしょう？」

「・・・・・・・・・・何でも無い。」

一週間くらい続いたわね。毎夜訪れて来るのが。

さすがの私もおかしいと思って、調べたのよ。そうしたら案の定だったわ。あの子は小さいけれど嫌がらせを受けていた。彼女自身の理由ではなく——私のせいで。

人は醜いわね。

やつかみ、妬み怨み。色々な人の感情がそこにはあつたわ。私は今まで無視してきたから、それが気に食わなかったのかしら。妹のあの子にまで影響が出始めたのよ。

腹が立つたわ。一瞬怒りで意識が飛んだもの。まあ、簡単に言えば

——その相手は捻り潰したわね。徹底的にね、勿論私は人とのそういう感情を避けて生きていけない人間なのだと知つたわ。だから、文字通りその道を進んでやった、自分の意思だよ。私が自ら小さくなれば嫌でもあの子の存在が明るみに出てしまうんだもの。嫌でも。

全てを私に。私が生み出したマイナスもプラスも全ては私に還るように。そう行動するよう心掛けたわ。・・・まあ、その内それが素になってしまったのだけれど。

あの子も本当に成長したの。もう私の元に夜来る事は無くなったわ。少し寂しいけれどね。

傍に寄り添ってくれる人は未だに出てこないのだけれど——
出てきたら出てきたで殴るわ。当然ね。——一人で立っていられるまでになった。

これから先もあの子が立っていられるようにしなくちゃ——そう思っていたのだけれど、気付いたら自分の為に行動していたわ。私もまだまだね。

でもあの子ならきつと許してくれるわ、自惚れじゃない——
——身内の特権、よ。

あらずし喋り過ぎてしまったようね。ワインが無くなったわ。

まあいいわ。こういう話を話すのにはやっぱりどうでも良い相手が一番楽ね。・・・あら、また目を洗っているの？ 洗剤でも入れたらどう？

いつけないわ。ごみ虫を相手にしている内にラヴェンツに雌豚共が寄ってる・・・いやあね。礼儀が成ってない。今日は私たちの婚約発表の為のパーティだと知っているでしょうに。それとも脳に刻むしわが無さ過ぎて、そんな事も覚えられないのかしら？

さ、早く行かなくちゃ。この会場のどこかにきつとあの子も居るわ。私が幸せだと教えて見せびらかさなきゃ。それが今日の仕事だもの。

・ ・ ・ それじゃ、どこの貴方。洗剤が無かったらワインで洗うのも良いと思うわ——— 勿論赤ワインでね。

——ある姉の自己満足一人話（後書き）

番外編です。お気づきだと思つのですが、まあリーテの。ずっと語り口調。

始めはそこまで酷くなかつた（はず。第一話くらい）なのに、気付いたらお嬢様な言葉遣い。いやいや、平民の出です。・・・どこで覚えたんだ。

この話は色々後々繋がる予定。
それでは。

読んでくださった方に感謝。
（読みづらいかもしれない）

賽を投げるタイミングを教えてください。

後編（前書き）

さて。

話は元に戻り少しだけ遡る。

賽を投げるタイミングを覚えてくれ。 後編

「へええええ。これがドレス。ドレスドレス。．．．初めて見たわあ。」

目の前には淡い青の．．．水色にも近いだろうか、文字通りドレス本物。うわあ、高そう。

「そうですよ！　どうやら、リアーナ様と同じ生地で作られているようです。素敵です。高級品ですよ、アカシエ様！」

ひい。やめてフィノル。破いたらと思うと恐ろしい。

主役と同じ生地らしい。いいの？　まず私が出る事からして．．．いや、そんな事を言っても婚約発表は一般市民の方々には今朝一番で知らされているし、貴族の方々には今夜パーティーで正式に発表、らしい。知らせだけならもう伝わっているはずなんだけど。

「でもねフィノル聞いて。私はね、礼儀作法なんて習ったことも無いし、基本の事でさえ知らないのよ！　ましてや言葉遣い。ああこれがきつと一番駄目だ。敬語？　なにそれザマス？　どうしようでしょう。」

姉の婚約発表で、妹の私が恥晒す訳にはいかないでしょう！

「大丈夫です、アカシエ様。」

「フィノル．．．」

「取り合えずは優雅に微笑み、頭をぺこりと下げて去っていけばいいのですから！」

「．．．．．ふ、ふうん？」

去っていいの？　そこ。まあいいや。

「でも一応貴族の方々のお顔と名前、重要な方々だけでも覚えておいた方がいいですね。」

「え．．．、な、何人位いるの？」

「ざっと30人は覚えておいた方がいいです。」

「．．．．．それ基本？」

「はい、基本です。」

うつむ。言っではいけない気がするが何故私が出たことも無い相手の顔と名前を覚えなければいけないんだ。一般、私は一般市民ですよ！。

「仕方ない。やりますか。」

「はい昼までにお願いします。それからはお着替えがありますので。」

「ああ。もうあと少ししかありませんよフィノルちゃん。実は鬼ですか、鬼畜ですか。」

そんな訳で私はひたすら人の名前を呪文のように唱え続けていたのである。

夕方になった。ドレスは直前に着るので、その為の何か薄い生地——だけを羽織って（顔も久し振りに化粧されて、髪も結われてしまった。鏡の中の平凡な自分より姉を見たい。絶対に目の保養になるに違いない。）私は大人しく椅子に腰掛けていた。だって動くと思われる、フィノルに。天使なだけに何処か迫力があるのだ。

日が暮れて空が赤くなった。ああ、後もう少しで姉はラウディの家を出る。二人で一緒に生きてきたけれど、姉は出て、もう一人の誰かと生きていくのだ。そして私は一人となるのか。

寂しく感じるのは、仕方ない。私の姉が誰かのものになる。生まれながら一緒にいても、きっと死ぬ時は別々なのだろう。・・・殿下ならきっと大丈夫。姉の心配は要らない。

感傷的になってしまった。さあ、今日は笑顔で心からのおめでとを言おう。（まだ婚約段階だけれど）

先に言うておく。この時はテンションが変だったのである。

「おーめーとーおおおおおおおー!!」

叫んだ。窓から外に向かって。

で。

落ち、

「る、ッ!!?」

ひひひひひひひひ。ここ、ここ高い! めっちゃ高いよそろもっ高いよ! 5階だよここ、城の!

ガッとお腹に腕を回されて何とか落下は避けられた。ふう。姉の目出度いはずの日が妹の命日だなんて、洒落にならない。間一髪。

「あ、ありがとー。フィノ、ル・・・?」

良く見ればあの天使の腕では無い。こんながつちりしていない。てゆかもっと肌色白で肌理細やかな美しいほっそりとした腕で・・・

「・・・・・・・・・・誰?」

知らない人が居た。無表情ではあるけど、目に感情が無い訳ではない人。見たことあったかな。・・・世間様の基準よりは高いお顔を
してらっしゃいますね！ 畜生！

朱と、所々に金の混ざった髪が風に靡く。

「え、えと？」

「お前がラウディ家の娘、リアテーナか。」

何で姉の名前？ 姉に何の用？ いやそれよりも。

違います、

そう否定する前に痛みを感じ意識は沈んだ。

何故美女と有名すぎる姉と私を間違える。阿呆かこいつ。（断じて

私は普通だ。）

ああ、でも。

こいつが間違えてくれて良かった。

ちゃんとパーティ無事に終えなよ、お姉ちゃん。

賽を投げるタイミングを教えてください。 後編（後書き）

微シリアス突入（？）なのか？

主人公がネガティブにならぬ限りこの話はシリアスになりません（断言）。

元からシリアス好きの私。一度なりだしたらとことんです。だって好き！

題名通り。動き出す始まり、と取って下さって結構です。賽は投げられます。

ピンチの時こそ冷静に。(前書き)

サブタイトルはアカシエが言う、「姉の言葉」です。

ピンチの時こそ冷静に。

生まれて初めて手足を拘束されました。それも鎖付き。凄い。一生縁の無いものだと思ってた！ 案外重いよ、捕らえられるのも楽しいね！

・・・とまあ現実逃避をしてみる。うん大丈夫。今抜け出したから。久し振り現実！

取りあえずは聞きたい。一。私何かしましたっけ。二。この手足拘束は一体誰の趣向で・・・いや、やめよう教育に悪いから。

牢屋かと思ったが普通の部屋だ。普通よりも些か高級なものが多いと言った方がいいだろうか。ソファも家具もきらきらしてる。そんな中壁に取り付けられたこの鎖。意味が分からない。きつと持ち主は相当な悪趣味に違いない。

首の後ろが痛む。あー、意識失うって怖い。だって城の部屋から一気にこの状況だよ。そら現実逃避もしたくなるっつの。せめて説明くれ。

まさかこのまま一日過ごすのかと思って憂鬱になりかけた時、部屋のドアが開いた。

「・・・。ネア。私が頼んだのはノウエル国の絶世の美女だぞ。どう間違えたら子豚を連れてくるんだ。」

「・・・。陛下。俺は貴方に渡された地図の部屋に居た娘を連行したまですよ。絶世の美女などという単語は聞いておりません。指示が悪いです。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

何やら物凄く重要な情報と、物凄く失礼な事を言われた気がしたが幻聴だろうか。

私の命の恩人 兼 誘拐犯である朱金髪の男はネアというらしい。
もう一人。「陛下」という事と、「ノウエル国の」という言葉。自
国にわざわざこんな事は言うまい。という事は此処は他国だ。国境
を越えているという事に一瞬気が遠く成り掛けたが、ショックを受
けるのは後にしよう。姉の言葉がこういう時に役立つ。状況把握が
第一だ。・・・つまり横の長髪猫目は、何処かは知らないが現在地
つまり此処の陛下だという事。まさかの国の権力者の登場だ。
こいつ等基この国は姉を連れ去ろうとした。「美女」と言うのなら
その容姿が欲しかっただけか。まあ馬鹿は何処にでも居る。それを
陛下（趣味悪）が指示した。

パーティだと知っていたのだろう。どうやって部屋の位置を特定し
潜り込んだは知らないが目的の「ラウディ家の娘」＝美女（片方だ
け）は二人居た訳だ。そしてはずれの方を引いた。運が悪いな。

暴言には今回限定で特別に聞かなかったふりをして、何故姉を連れ
去ろうとしたのかだけでも目的を聞かなければ。でもまさか姉の噂
が他国まで届いていたとは。人の口に戸は立てられないとは本当だ
な。

・・・恐るべし姉。

「で？ 子豚よ。お主まさか本人ではあるまいな。名を告げよ。」
ふふん。売られた喧嘩は買って徹底的にやり返す主義だ。私たち姉
妹に何かしようものならそれ相応に欺いてやる。

「・・・リアテーナ。リアテーナ・スー・ラウディよ。何か
私に用なの？」

・・・・・・

他国の次期国王、花嫁に手を出そうとした。

下手すれば国家間の国を巻き込んだ阿呆な戦争が始まる。姉は断じ
て傾国の姫などではないのだ。

そのリスクを背負ってまで、一体何故姉を連れ去ろうとしたのか。
知って、教えなければ。

「何？ では本人だというのか。・・・「絶世の美女」とは、随分不相応な通り名を付けられたものだな。라우デイ家の娘よ。いや、もうすぐでノウエルが家名となり同時に国の名を持つのか。確かあの男の名は・・・、ああ。そうだ。ラヴェンツ・オウア・ノウエル。あいつの花嫁になるらしいな。」

私が本人で無かったら（いや実際違うけれど）どうしたのだろう。こんなに下手に情報を与えていいものなのだろうか。

「・・・いいの？ もし私が本人で無かったらどうするの？」

「いや。お前は本人であろうよ。」

何故、と問う瞳に気付いた「陛下」は笑った。嘲笑うように。

「ふん。仕方ない何も知らぬ幸せな娘に教えてやろう。「라우デイ」という名は本来少し発音が違うのだ。その一族のみが発音出来る為か、一般としては違う今の発音し易い方で伝わり浸透したがな。今ではその事実を知る者も片手の指で収まるだろう。本人でさえも知らぬのだからな。」

・・・発音が違う？ 何それ？

確かに耳が良い子に指摘された事はあった。「発音が違う」「どうしたらそう言えるの？」とからかわれた事もある。でも私一人じゃなかったから。大した事でも無いし、気にしなかったのだ。

「・・・それを何故貴方は知っていて、判別出来る。」

「ふん。そこまで教える義理は無いだろう。・・・だが特別だ。昔라우デイ家で成人するにはな、その家名を全て正確に発音出来る事も条件に入っていたんだ。その点に關すればお前は合格だよ。」

「・・・うちは貴族の家などではない。」

「知っている。」

ハツと鼻で笑われた。ああああああああ。ムーカーツークウウウウウウウッ！！！！！！

「飽きた。ネア。その子豚の面倒を見てやれ。絶世の美女とやらなら私が直々に世話でもしてやろうかとも考えたが、豚と話していても私は人間なので言葉が分からぬのでな。」

「失礼ですね陛下。俺も立派な人間です。」

「嘘をつけ。野生の獣の間違いではないのか。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。聞こえない聞こえない。雑魚の言葉を聞く耳を私は持ち合わせていない。むしろ聞くな。聞いたら何かが爆発する。」

失礼陛下（国のトップがあんなんでは、直ぐ滅びるのでは）が去った後、無言に成る室内。

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

話せ、何か話せよ！ こっちはこれでも一応手足拘束中だぞ！ 縄は姉により経験あるが、鎖は初めてだよ良かったなおめでとう！

「・・我慢しろ。鎖は陛下の趣味だ。」

「趣味なの！？ やっぱり！？ 変態臭い顔してたもんね、分かるわ。っつか声に出たの。やだ私ったら淑女なのに。」

「すまない。後半聞こえなかった。」

「そう。耳がよっぱど悪いのね。頭も伴って退化中のように可哀相。」

「俺は大丈夫だ、それに該当するのはむしろ陛下の方だ。」

「・・どうしよう。この人天然なのかわざとなのか頭が悪いのか嫌味が全く通用しない。でも「陛下」の悪口（？）には凄く共感出来る。仲良くなれる予感だ。」

「ああ、やっぱり？ あの私色々末期だと思う。何だか人間的にも終わってると思んだ。この部屋も陛下とやらのご趣味、なんですよっ？」

「よく分かったな。何やら普通の部屋なのに鎖、とかいうギャップ？ だか良いんだそうだ。身分の高い罪人も連れてくる部屋だぞ。」

「ああそれはもう性根から叩き直さなきゃ駄目ね。あなた、ネア？
も大変でしょ。」

「ネルア・クー・ハジエントだ。」

「ああ。あなたの髪の色が由来な訳？」「ネルア」って、夕日の事
でしょ。色は混ざっていないけれど、配色は一緒なものね。」

「そうだ。」

「ふうん。まあ、綺麗な髪だし親御さんも中々の良い名前付けたん
じゃないの。」

「……………だが、よく女に使う名だろ。」

「え？ 気にしてんの？ 器小さいわね。」

「……………そういうお前はこういう由来なんだ。」

思わず「アカシエ」の由来を説明しそうになったけれど、危ない所
で今は「リアテーナ」だと言う事に気がついた。

「えっと確かある街の昔の名前よ。両親が出会った場所だったらし
いわ。「リアナ」っていう街だったらいいのだけれど、名前らしく
少し改良したみたいね。」

姉の名は。

「それも、良い名なのではないか。」

まあ姉の名ですから。

「……………で？」

「何だ？」

「どうして私は此処に連れて来られたの？」

「・・・・・・・・・・すまんが秘密だ。」

溜めてそれかい。

お姉ちゃん、私未だに拘束中ですよ。

ピンチの時こそ冷静に。（後書き）

陛下変態です。性格悪いです。

あと長いですね今回。気付いたら長くなってた。

理由はきっとシリアスが大好きだから。

元気に囚われてますよ。

どうやら私が気絶していたのは二日間だったらしい。丸々二日。・
・長くね？　と思っただけれど、途中からはぐっすり寝ていた（我ながら呑気な）らしいので納得だ。通りですっきりしている訳だ。
そして。

人間適応力というものがある。改めて実感した。いや本当に。やってみたら囚われの身とやらも三日目となれば慣れるものなのだ。

「おいリーテ。入るぞ。」

「はいはい、どうぞー。」

「菓子を買ってきた。食うか？」

「えー、食べる食べる。此処の食事、デザート無いから糖分が欲しくなるのよね。乙女にとっては拷問だね。」

太るぞ、という言葉は聞こえないふりをしてプリンを頼張る。ああ美味しい。ネアは良い奴だ。でもその「良い奴」が仇になって私は此処がどこの国か特定出来てしまった。此処はサハル工。我がノウエル国より2、3南に行った海に面する国である。重要なのは、ノウエルと同盟を結んでいないということ。そして弱点は何処か抜けている所であろうと今確信する。私が特定出来たのだ。

一つ目はネアが買ってきてくれたお菓子。これは完全にネアの責任になるだろうけれど、ケーキがサハル工独特のクリームを使っていた。色が黄色なのである。

二つ目はこの部屋に置いてある家具。陛下とやらの敗因だ。サハル工の北の地方にある木を使った家具がほぼ全てだった。他国でこの木を使う者は殆ど居らず（高価な事も原因の一つ）、流通しているのはサハル工のみだ。前に店に置く物を買に行った時に詳しくなった。

まあそう思わせる為の部屋かもしれないが途方も無いのでそうしておく。

ああ、姉に知らせなければ。というかのんびりしている場合ではなく、直ぐに戻らなければ絶対大変な事になってる姉が暴れてる怒ってるああああああ。胃が痛い！ 心配で泣きそうだ！

でも脱出出来ないのは嫌でも分かったし、窓も無いので知らせる方法も無い。

何故姉を狙ったのかだけでも知らなければ。「ラウディ」に関してどのような関わりがあるのか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・めんどくさい。」

「あ？ 何がだ？」

「いや何でも。はいありがとプリン。美味しかった。」

「そうか。」

ふわりと表情を和らげて頭を撫でるのはなんだか反則のような気がする。・・・ネアあんた普段無表情なんだからいつそそのまま貫き通しなさいよ！

何も無い部屋に一人一日中居るので、ネアが来てくれるのはありがたい。正直孤独だから。人と話せるのは嬉しい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・外出たい。」

いや無理だろうけどね。

「何か言ったか？」

「何でもない。空耳だよ。」

「そうか。じゃあな、リーテ。」

・・・・・・・・

だからアカシエだつて。心で毎回ひっそりと文句を言うのは秘密だ。

ネアが出て行ってから一時間程。（あと陛下も顔出した）また孤独

の時間を過ごしていたら、風がこの部屋に通る事に気が付いた。完全に密室の為、風の通りなど無いはずなのに。

「・・・・・・・・・・」

ドアが僅かに開いてる様に見えるのは目の錯覚だろうか。

「・・・・・・・・・・は、」

え？ え？ わざと？ ねえこの国わざと？ 最後に来たの「陛下」だから、鍵閉め忘れたのも陛下だよ？ 国のトップ。トップなんだよね？ わ、罨？ 罨なのか！？

分からない。間抜けすぎて分からない。開いた、開いたよ扉！ いいの？ ねえいいの！？

あっさり過ぎて逆に出るのを躊躇ってしまう。鎖が五月蠅いからやはり出たらばれるだろうか。

そつと足を出しても何も起こらない。うむ。安全確認良し。出てみよう。

運動不足だったので走ってみた。廊下をがむしやりに。

で。捕まった。当たり前だけど。

「・・・お前は。一体何をしているんだ。」

「いや、どうもネア。今日は空気が美味しいね！」

「山じゃないぞ此处。」

冷静に切り捨てられた。阿呆だ。何て阿呆なんだ私。せめて庭園とかにでも出れば外だからもう少しましになったのではないだろうか。後悔しても時既に遅し。涙が出てくるよ本当に。

「・・・う・・・っ、大地を駆けたいと思うのは生き物としての当然な・・・」

「どうでもいいが丁度良かった。確認したい事がある。リーテお前、

知ってるか？

リアテーナ・スー・ラウディ次期王妃は現在ノウェル国王城に居る
そうだ。」

「……は、はい……」

冷や汗。冷や汗だらだらだ。

「それでまあ、確認に三日掛かったがラウディ次期王妃は金髪に蒼
の瞳だそうだ。」

「そ、そうですね……」

「お前は、茶髪に蒼の瞳だよな。別人物だよな？」

「……」

無言はせめてもの抵抗である。

「……別人だよな？」

目が。目が怖いです旦那。ひiiiiiiii。どうしようどうしよう。
え？ 本当の事言うべきなの？

「な？」

「はい。」

負けた。口喧嘩は得意だが無言の争いは苦手だ。というか一般市民
そんな逆らう程の免疫力はございません。ああ、何故こんな事に。

「それで、お前の本名は何なんだ？」

私は陛下が後ろで聞いていることに気付きながらも追い払えず、恐る
恐る名を口にした。

「……アカシエ。アカシエ・スー・ラウディです……」

「「は？」」

すみません。姉妹です。その次期王妃と。

元気に囚われてますよ。(後書き)

無茶な設定お気にせず。

主人公負けました。何かに。

嘔吐きは泥棒の始まり。(前書き)

陛下性格悪い・・・。

9話位まで登場人物や周りの状況の紹介の意味があったので、物語が進むのは書いてて楽しいです。

嘔吐きは泥棒の始まり。

「嘘言うな！」

真つ先に怒鳴ったのはヘイカ（「陛下」だと阿呆が権力者だと認めているようで癪なのでこうしておく。）だった。

「【ラウディの生き残り】が二人居るなどと、私は聞いていない！
本当の家名を言え！」

「無茶言うなよ！ 自分が知ることが全てだとも思つて自惚れていたのか！？ 私は歴としたお姉ちゃんの妹だ！ 自分の無知を他人にぶつけないでくれる！？」

「何だと！？ お前、私が誰だと思つてるんだ！」

「こつこつと無駄に権力振り回す程愚かな奴は居ないわよね！」
「~~~~つ、捕らえるぞ！」

「もう捕らえられてるわボケ！」

話がずれてきた気がするがまあいい。口喧嘩には勝つたのですつきりだ。

ゼエハアと肩で息をしていたら、ぼふりと頭を胸に寄せられた。後ろに傾く形と成る。

「落ち着け、リーテ・・・って、実際は違つのか。陛下も落ち着いて下さい。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・ああ。」

睨む睨む。もうヤダ。こいつは完全に敵と認識。容赦なくいつてやる。

「で？ 「リーテ」、お前の本名は「アカシエ」なんだな？」

「そうよ。」

「じゃあ俺が連れてきたのはノウエル国次期王妃ではなくその妹だと。」

「そうよ。」

「・・・・・・・・・・どうします、陛下。」

「その子豚が言っている事が本当なら、子豚一人で十分だ。ラウデイ家の娘なのだろう。」

「ねえだからラウデイだとどうなる訳!？」

さつきから人の家名をやたらと連発しやがって。説明しなさいよ説明。気味が悪い。姉を連れ去る必要はないと私一人で十分だと判断してくれたのなら大助かりだ。姉の今の立場で連れ去られる訳にはいかない。尤も、そう上手くいくとは限らないけれど。

「教えて下さいと、私に跪くのなら考えてやらんこともないが？」

・・・・・・・・

・・・嘘だ。嘘を吐くのはどっちだ。絶対教えないパターンだろう。何て性格が悪いんだ。

「ふん。どちらにせよラウデイ家の娘なら構わない。元から用意してあった部屋へ入れておけ。」

ネアに引きずられながら私はその場を後にするのだ。

「豚を馬鹿にする者は豚に泣くわよ!」

美味しいんだから。

「ネア。」

「なんだ。」

「・・・・・・・・何この部屋。」

キラキラして目が痛い。豪華だ。そして馬鹿みたいに広い。姉の城での部屋とそう変わらないのではないだろうか。・・・今ではもっと良い部屋に移っているだろうけど。

「発音を正確に出来るのだから、お前が絶世の美女とやらの妹には変わりないんだろう。嘘は言っていないと判断した。元から用意してあった部屋だ。」

「じゃあ何だったのあの拘束生活は。」

「・・・いや、その、」

「何よ？」

「陛下が、「絶世の美女」とは程遠いから念のため調べる、だからあの部屋に捕らえておけと。・・・」

「・・・。。。」

「・・・。。。」

「・・・。。。」

確かに私はじいちゃん似だが。姉との共通点は瞳の色と口の悪さ位だが。

「・・・毒を盛ってきてても良いだろうか・・・」

「一応言うが駄目だぞ。」

親しくなった人達に遠慮がちに言われたり、影でひっそりとネタにされていた事はあるけども。周知の事実でもあったし。それでもやはり初対面の人間にそう堂々と判断されると殺意も沸くものだ。では服にでも毒針を仕込んでおこう。

ふと頭に手を置かれるのを感じた。上を見上げるとネアが無表情ではなく、ゆつたりと微笑んでいた。

「・・・っ、だから！ 普段無表情なのにどうしてこういう時だけ微笑む！？ 笑う！？ 意味が分からない！ 絶対にこいつは狙ってやっているに違いない！ 確信犯だ！ 畜生紅くなるな私の頬！」

成ったら負け成ったら負けとよく意味の分からない呪文を唱え、落ち着かせた後熱を振り切るように顔をぶんぶん横に振った。

「・・・よしOK。通常モードオン。」

「・・・、ネア。私の事子供扱いしてるでしょう。」

「は？ 何を言ってる、子供に子供扱いするのは当然だ。」

「・・・ネアは私を何歳だと思ってるの？」

「じゅう・・・5か6か？」

「・・・。。。」

ひ、酷い・・・！ これは酷い！ 体型的には確かに凹凸は少ないかもしれないけれどそれは無いだろう！

「18！」

「・・・は！？」

「じゅ、う、は、ち！ だから！ 18歳なの！」

「・・・俺と2歳差？ なのか？」

20なんだねネア。案外近いな年の差。もっと老けて見えてた。声には出さず心でひっそりと謝る。うん。すまんネア。幼く見てしまった事に気まずく感じたのか分からないけれど、ネアは帰るとウターンした。分かり易いぞ。

「じゃあ、

また来るぞアカシエ。」

返事も待たずに閉じた扉に思わずズルリと凭れかかった。・・・あれ何だこれ。

やっと呼ばれた姉の名ではない本名に胸の中が何故か暖かくなり、疼く。（さっきも呼ばれたけれど、意味が違っただろう。）

見えた背中に手を伸ばしたいと・・・ん？ いやいやいやいや。待て待てアカシエ。何を考えてるんだ変態か！ 確かに鍛えていて良い背中だったけどね！

まあいいやと思考をそこで打ち切って、豪華な布団に身を沈めた。

嘔吐きは泥棒の始まり。（後書き）

主人公が色んな意味で暴走中です。

それから、お気に入り小説登録数が50件を超えました！
もう本当にありがとうございます！！

見ていて読んでくださる方が居るんだなあ・・・、と涙が出てきます。いやホントに。嬉しいです。

宜しければこれからも目を通してやって下さい。
もう一度。ありがとうございます！

ではまた次話に。

修羅場に成ったら取りあえずは黙るべき。
(前書き)

ヘイカに「貴様」って言わせようか悩んだ。

修羅場に成ったら取りあえずは黙るべき。

「それでだな暴れ馬。大臣たちと顔合わせして貰うぞ。」

何が「それで」なのか全く分からん。完全に寛ぎタイムだった乙女の部屋に突然乱入して来た拳句涼しい顔をしているヘイカは人外語を喋った。

「誰が暴れ馬なの。何時子豚から変化した訳？」

「お前の凶暴っぷりを上手く表現するにはそれがぴったりだっただけだ。」

「そう。じゃあヘイカさんは暴れ馬如きも乗りこなせられない奴だったんだねー。まあ知ってたけど。」

ふんつと鼻で笑ってやるとヘイカは顔を赤くして震えてた。おーおー、分かり易いのが此処にももう一人。こいつ口喧嘩弱くないか。生きている間に顔も見たくない程嫌いな奴がまさか二人も出来るとは。まだまだだな私は。

「五月蠅いぞお前っ！ この私に向かってその口の利き方！ ラウデイの娘でなければとつくに不敬罪と侮辱罪で牢に閉じ込めてる所だっ！」

負け犬定番台詞を堂々と吐いたヘイカはそれに気付いているのか否か。

「ほうほう。一度ならまだしも二度も下手に権力を盾に使うとは、よっぽど御自分に自身がないのかねー。」

「・・・っ、お前っ！」

ずんずんと近づいてきたヘイカに警戒する。まあ幾ら何でも殴るまではしないだろうが。

というか放って置いて欲しい。私は今現在、というかここ数日、今まで考えたことも無い議題で脳内会議を開いて悩んでんだって！

あああ、だから口喧嘩も人と会うことも他の事について考えるのも

遠慮したいの！ だから今すぐ出て行け、近づくな鳥肌がたつ！
・・・という一瞬の思考もお構いなしにヘイカはあつという間に私の胸倉を掴んだ。

ちよつと。伸びるんですけど、このワンピース。

「・・・お前は一度、痛い目みないと分からないらしいな。」

「力で従わせられると思ってるならとんだお気楽ヘイカだね。んなモンで従うのは臆病かただの馬鹿だよ。」

んべ、と舌を出すすと更に頭に血が上ったのかヘイカの体が傾く。

脳内会議中につき、只今何処までやっていいのか判別がツキマセン。あれ。

ドサリ、

背中に僅かな痛みを感じると上にはヘイカ。その更に奥には天井。後ろには床。うん、カーペットが見えるなあ。・・・アレ。つまりこれ。

「ちよつとおおおお！ 何押し倒してんの、私の美しさに目が眩んだかつ！」

顔が近い、顔が！ あああああ、鳥肌がっ！ 脳内会議が中断されてしまったではないか！

「冗談もほどほどにしろ！ 何故美しいという言葉から縁遠い様なお前に欲情せねばなんのだ！ 体重が傾いたただけだわつ、私がお前如きを抱くなどと考えただけで虫唾が走る！」

「お互い様よそれは！ 早く退け！」

ひいひいひいっ、嫌いな野郎の息が掛かる事ほど嫌なことってない。余りに嫌で思わず涙目になる。触れるな！

「・・・。何だお前、予想以上に泣き虫なのか？ ふふん。こんな事が怖いとは。」

それを見たヘイカが余裕を取り戻したのか偉そうに微笑む。

「違うわ大間抜け、勘違い阿呆！ 気持ち悪すぎて嫌なだけだつ、」
「・・・な・・・つ、お前っ！ 「気持ち悪い」という悪口程傷に塩を塗りこむ言葉だという事を知らんのかっ！」

「承知で使ってるのよっ、だって私ヘイカが傷ついても構わないしーっ！」

「お前、お前はきつと幼少期とんだいじめっ子だっただろう！ 少しは躊躇というものを覚えろ！」

「失礼ねっ、小さい頃はそれはそれは純粹で健やかな子だったわよ！ 大体ヘイカに躊躇する必要が一体何処に・・・！」

「言うなそれ以上！ 言っても良い事と悪い事があると習わなかったのか！」

「ヘイカに関して悪い事なんざ無いのよっ！」

ギリリ、と若干泣きそうに悔しそうに齒軋りしたヘイカは落ち着かせる様に一旦深呼吸をした後、にやりと笑った。

「・・・え、いやいやいや。嫌な予感が。」

冷や汗が垂れる。

まさか私が一番やられて嫌なことに気付いたんじゃない・・・、でもそこまでヘイカは横暴で最っ低な奴じゃないわよね、私信じてるよ今だけ！

嫌な予感程当たるもの。ヘイカの顔がゆっくりと近づいて来た。首筋に向かつて。

「・・・まっさかぁー、待て待て待て。ひiiiiiiiiっ。」

リミットが限界を超え左の目から一粒涙が零れるのが分かった。時に、

「アカシエ。今日はアイスを持って来た。少し溶けてるかもしれないが・・・。」

入ってきたネアが固まる。

その視線がゆつくりと部屋の状況を見、ヘイカと私の体勢を見、完全に悔しさと気持ち悪さで涙を流してる私と目が合った。

まあ両手は押さえられてるし、ヘイカの顔は私の首筋——ネアから見たら唇へ見えるだろうか——へ向かってる途中だし、私は泣いてるし、

ヘイカが私を無理矢理襲っている状況、……に見えるだろう。固まったまま視線を逸らさないネアに声を掛ける。

「ネ、ネア……、」

あれなんか予想以上にか細い声が出た。乙女っぽいな私。まあ泣いてるからなあ。

ボトリ、

あ。アイス落ちた。カーペットが汚れるなあ。それにしても勿体無い。アイスは今回が初めてだったのに、畜生ヘイカめ。

ネアは既に私から視線を外し、ヘイカを見てる。……睨んでる？ そつとヘイカを見ると顔が真っ青だった。愛想笑いの形のまま硬直してる。石像のようだ。

……あれ何この空気。

口を出してはいけない男と男の修羅場であると空気が物語っている。はい、私は空気が読める子なので口を挿みません。

「陛下、何、やってるんですか……？」

「いえ……、そ、その……」

「俺が知らぬ間にアカシエの所へ行くなど申し上げたはずですよね……？」

「……」

「まさか、今回以外にもあったなんて……言いませんよね……？」
ありましたよ。度々乱入しては文句を言い逃げしてましたよ。

その辺は既に察しているのか、ふう、とネアは息を吐いた。

「イー ルア様、姫様・いや、姉上様に今からでもお教えしてきましようか。昔イー ルア様が大切にしていた手鏡やアクセサリーが無くなったり壊れていたりしたのは全て光物が大好きだった陛下の仕業ですよ、と。」

「ひ、っ！」

何をしてたんだヘイカ。よっぽどイー ルア様とやら（ヘイカの姉と見た）が怖いのか、今度は震えだした。

「嫌ですよ陛下？　だったらもう二度とこのような事はなしにしてください。それから一週間はこの部屋に足を踏み入れないように。アカシエと接触も許しません。」

「いや、でもあのだな・大臣たちに・・・、」

「何か仰いましたか陛下？」

「・・・。」

真っ青な顔のままヘイカはひっそりと部屋を出て行った。あれ今のどっちが主人？　ヘイカ弱い。

まあこれで一週間は平和か。

ため息を吐いた所で歪んだ視界でもう一度ネアと視線が合う。

ん？　今部屋に二人つきりじゃないか？　いや、ヘイカの時もそうだったけど訳が違う。

だってまだ脳内会議の結果が出ていない！

『恋してしまったネアに今後どう接せられるかについて』なのに！、

頭の叫びが声に出る事はない。

修羅場に成ったら取りあえずは黙るべき。(後書き)

長く、なり・ましたね？ 今回。

いやすみません。

なんせ楽しかったもので気付いたら・・。

こんな熱、私は知らない。（前書き）

シリアス？

シリアスかな今回。

てゆか最低ですねヘイカ（今更）

こんな熱、私は知らない。

完全にパニック状態になった頭は緊急事態に対応出来ない様だ。
というか機能していない。くそう、この役立たずっ！・・・あつ、
自分のだった・・・。

目の前にしゃがみ込んだネアの姿が、数年振りに流した涙で歪む。
まあ、悔し涙なんだけどね。

今度もしヘイカに会う事があつたら真っ先に報復を試みよう。取り
あえずは男性の急所を狙おう。動けなくなるらしいからその間に顔
面を狙おう。姉に習ったとおり。
記憶が溢れてくる。ああ、違うのに。今と昔は全然違うのに。
力勝負で勝てなかったことが悔しい。

——仕方ないわよ、シェイちゃん——

「仕方ない」で済む問題であることが悔しい。

——勝てなかったのは、私なのよ。だから、シェイちゃんが泣く
ことないでしょう——

でも今回は私だよ、お姉ちゃん。悔しいんだよ、お姉ちゃん。

——弱くならないように。対処を——

——男だつたら、良かったのに・・・。

悔しい悔しい悔しい。どうして私はっ、

ギリ、と歯が軋む。いつの間にか拳を作っていて、それが強く震えていた。

「・・・大丈夫だ、アカシエ。」

—— 大丈夫よ、シエイちゃん ——

「俺が此処に居るぞ。」

—— 私が此処に居るわよ ——

・・・・・・ん？

頬に当たる肩が涙で濡れていた。

強く握り締めていた拳は広げられ、しっかりと指を絡められもう元に戻らないようになっていく。

背中にはあやす様に大きな手が添えられていて、私は恐る恐る横を見た。

・・・夕日色の髪の毛が見える・・・。

しかも目の前に。むしろ顔に当たってくすぐったい。

畜生、サラサラかつ、サラサラヘアーなのかこの野郎っ。

いやいやいやいや。

現実逃避するな私。待て待て何だこの状況。何時なった、一体何時なった！？

顔に熱が集結する。よし、集まれ、熱！・・・なんて血液に向かって指揮を振る阿呆な映像が一瞬頭を過ぎった。あれか。到頭私にも末期の症状か。

「ネ、ネア・・・、あの、ヘイカ・・・」

ピクリと揺れた振動が私にも伝わる。うおおおおおいっ！
恥ずかしい、恥ずかしいやめて下さい今なら土下座出来る！

「・・・アカシエ。」

「・・・はい。」

風を僅かに感じると、ぐいっと肩に手を置かれ真正面を向かされた。ちよっと待って、頼むから待って！ もういいよ集まらないでくれ

熱！

つまり顔真つ赤だ。…………穴に入りたい。しかも顔近い。至近距離。

……これは……恋を自覚したばかりの乙女（？）に対する嫌がらせでしょうか……。

「……アカシエは、陛下を慕っているのか？」

「は？」

頬を染めた表情から不機嫌な表情までの変化、この時0・1秒。人間って凄いな。

「冗談じゃないわよ、あんなこの世が終わるぞと脅されたってお断りよ！」

「……………そうか。」

一瞬目を見開いたネアは直ぐに複雑そうな表情になり、哀れむ表情になり、安堵の表情になった。

何があつたのだろう、心の中で。

殆ど変わらないけれど見ていればネアの表情の変化はよく分かる。

「ネア、アイス……」

「ああ。落としてしまった。すまないな。また買ってくる。」

良かった、今回限りだったなんて言われたら更にヘイカに攻撃を加えなければいけなかった。

「ところでアカシエ、何故あの状況になったんだ？」

至近距離で真剣な瞳でネアに聞かれた私は反射的に、

「嫌がらせで押し倒されました。」

……答えてた。本当は喧嘩から体重傾いてあんなただけなんだけれど。

「……………そうか。」

案の定ネアの目が据わり、声が低くなった。く、黒い。ざまあみろ
ヘイカめ！

「何もされなかったか？」

「……………どう答えたらヘイカの罪は重くなるだろうか。出来るだけ重
く重く、ネアに怒られればいい。」

ああでもヘイカに何かされたただなんて、嘘でも嫌だ。あとネアに言
うのも嫌だ。

から、正直に言おう。感謝しなよヘイカ。

「キス、され」

そうになっただけ。首に。

無理矢理遮られた言葉は喉元へと戻って行った。
いや、吸い込まれた？

……………何これ。

……………これが噂のちゅーですか。

ネアの瞳は閉じられていた。

こんな熱、私は知らない。（後書き）

あーあーあーああ。

ごめんなさい作者恋愛色苦手です。書くの。読むのは好きですが。分かりづらかったかもしれません。

てゆか苦手過ぎて途中で何度も全消去しそうになりました。

よく持った、私の指よ！（↑

だって無理。キャラ崩壊してないか心配・・・。

読み返す気力無い・・・

これってセーフですかアウトですか。R15とやら。
境界線が分かりません・・・

手え出しちゃったねネア。

口は災いか幸か自爆の元か。

「……………えー……っ？」

唇にあった熱はやがてゆつくりと離れていった。それと同時にネアの瞳も開かれるのを見る。

ネアは誤解してないだろうか。というかあのタイミングは絶対に誤解してるだろう。何故あそこで言葉を遮る。人の話は最後まで聞きなさいと言われなかったか。

「ネア。あの、ね。ヘイカとは」

「いい。聞きたくない。」

いや何で。駄々っ子か。

「だから、ヘイカとはっ」

「五月蠅い。またするぞ、キス。」

顔に再び熱が集まる。え、さっきのキスで間違いなかったの？ ああ、そう。妄想とかじゃないんだ、私の。幻覚でもなくて。

「ちょっ、何！？ 何事！？ あれキスだったのやっぱり！？」

「……………お前は、それ以外になんだと言うんだ。」

「いや、だからねっ！？ そうなの！？ 現実！？ だってまさか自分の身に起こるものだとは思ってないじゃない！」

あああああああ……………自分が何を喋っているのか分からなくなるのはどうなのだろう。

ぶっ飛んでないだろうか。色々と。順序。

やめて、時間が経てば経つほど恥ずかしい！

「……………って、そうじゃなくてっ。ネア本当に聞いてっば。ヘイカとはっ——ひっ！」

また遮られた。強制的に。考えるな考えるな私！ セカンドキスだなこれとか考えるな説明も何も出来なくなるから！

……………な、長い。長いですちよっつとで良いので離して下さい。

願いが通じたのかゆつくりと再び離れていく。・・・ん？

「な、舐めた・・・？」

「何のことだ。」

「いや今ペロリと。離れ際に。」

「知らんな。それよりも「ひ」とは何だ。」

「反射的に・・・え？ 舐めたよね？ 舐めたの？」

「・・・アカシエ。舐めた舐めた連呼するな。」

「すみません。」

あれ主従関係？ 違うよね違うよ。謝るな私。でもね。毒舌っていうのは口から言葉が発せられて成り立つもので、口を遮られたら私は何の戦闘能力も失うのよ。殆どゼロになるのよ。

「ちよつとネア最後まで聞いて。ヘイカとはね、おっと。」

学ぶ。二度もあればさすがに学ぶ。近くに來たネアとの間に手を添えて一先ずのガード。取り合えず今は喋らせて。

「・・・。。。」

「何その顔。だから最後まで聞いてつて。別にへ

ー、っ！、」

一文字！ 一文字だったよ今！ 一瞬で手を掴まれて私の僅かな間の抵抗終了。

恥ずかしいよ死ぬほど恥ずかしいけど。今の私の中では 説明>キス なのだ。すまんネア。優先順位があるから今それはやめてくれ。さつきは舐めたと思ったたら今度は甘噛みしてきた。犬？ ねえ犬なのこの人！？

「ちよつ、だからっ！・・・」

「・・・。。。」

「、待つてつて・・・」

「・・・。。。」

「——っ、このっ、」

・・・腹立ってきた。ネアでもここまで話を聞いてくれないと爆発

する。仕方ない。

「やめなさいって言ってるでしょっ！」

おお、効いた、鳩尾パンチ。ちなみに姉直伝。役に立つなあ、この国に来てからよく姉の教えは。

でもかなり痛いと聞いていた事を思い出し罪悪感。しまった、ヘイ力にやっておけば良かった。

「・・・あ。ごめん、いやでも今のはネアが悪いよね。」

「・・・っ、・・・すまん。」

ああ痛そう。本当にごめん。力加減を間違えた。思いっきりやって良いのは嫌な奴と敵限定だった。仮にも好きな相手になるものでは無かっただろうかと反省する。

「あのねネア。ヘイ力には嫌がらせでキスされそうになっただけで、それも首筋に。その前にネアが来たから本当に何も無かったんだよ。」

やっと言えた。

「・・・そうなのか？」

「そうだよ。大体私ヘイ力なんかキスされる位ならこの城から飛び降りた方がまだマシだから。」

つまりは死んだほうがマシだと。

それを聞いたネアはほっと息を吐いた。———お腹を押さえたまま。

「そう、か。良かった・・・。すまないアカシエ。・・・結局俺は陛下と同じ事をして・・・。」

「いいよ別に。好きな人にされるのと大嫌いな奴にされるのでは天と地の差でしょう。」

「・・・。。。」

黙ったネアを不審に思う。こちらを凝視してる。何か私は変な事を口走っただろうか。ただ本音を言っただけのはずなのだけれど。別

に、いい。好きな人と大嫌いな奴では天と地の差・・・、だ・・・
・と？

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・い、いや。なななんでもないでっしゅ。わすつ、忘れて
くださいいいいいいい。」

「・・・・・・・・噛んでるぞ。」

自爆、自爆自爆。自爆、した・・・・。

なんて事を口走ったんだ私・・・いやでも「別にいい」の理由を正直
に言ったままで・・・。

それが駄目なんじゃないかと気付いたのはその直後。
どうやら私は相当の阿呆らしい。

「・・・・・・・・そうか・・・・では、互いに同じ気持ちなら『別にいい』よ
な、キスしても。」

「・・・・・・・・は、う？ うん？ そ、そうだ、ね・・・・・・・・？」

え？ 何が？

「陛下も一週間は来られないようだから丁度良い。」
えとだから何が？

「取りあえず鳩尾はやめて欲しい、アカシエ。」

「あ、はい・・・・？」

キャパオーバーです。

誰かナレーターを、状況説明を！

・ ・ ・ アカシエから事の全貌を聞いたネアにより翌日、城に陛下の悲鳴が響くのはまた別の話。

お姉ちゃんに知られたら漏れ無くネアの存在を消されそうです。
大砲はやめて、大砲は。

口は災いか幸か自爆の元か。(後書き)

いちやつき？

どうだろつキャラ崩壊。もういいや、うん。

姉の怒りに比べたら修羅も霞む。(前書き)

本編で凄く扱いの酷いヘイカの影での頑張り。

今更ですが激怒したままのリーテの政治的攻撃に苦労しましたよ。
自業自得ですね。

姉の怒りに比べたら修羅も霞む。

「ねえ、【ラウディの生き残り】とかだと一体どうなる訳？　そもそもそれって何？　どうして私は誘拐されたの？」

ヘイカと一切接触していない日数、今日で五日目。本当に来ない事に驚いた。

ネアのやたら多いスキップのタイミングも分かるようになってきたし、それに対する防御も身に着けた。・・・だって慣れないんだもの！　そう簡単にやられてたら心臓が持たなくて倒れるわいボケ！　よく分からないけれど、見た目とイメージに反して予想外にベツタりさんだったネアは、今も私の茶髪を弄くっている。・・・何でもないように書いてるけど、ドッキドキだからね！　もうやだ泣きそうだ！

・・・そして一時すっかり忘れていた事を今更思い出した私は、ネアに聞いたのだ。

それに対するネアの答え。

「知らん。」

「・・・。」

んな馬鹿な！　三文字！　三文字で終わったよ！

「嘘吐けえい！　せめて誘拐理由だけでも答えろ！」

「いや、本当に知らない。普段と違って真剣な陛下に「国王」として命令されたんだ。何も聞かず、ただ、ノウエル国の城にいる絶世の美女を攫って来いと。・・・まあ渡された地図はアカシエの部屋のもだったがな。つまりはそれだけ重要だという事。話したくても聞きたくても俺は王族ではないからそういった秘密を聞くことは出来ないんだよ。」

・・・お、重い事情・・・。

そう考えた自分の感想の阿呆さに気付くのはもう少し後だ。

「国王として命令する程重要、って一体何？　他国の城に侵入して

誘拐するのも厭わないという程でしょう？」

それに今私は不覚にもノウエル国次期王妃（仮。婚約だから）のたった一人の身内なのだ。

「知らないな。陛下に吐かせ・聞くか。」

・今なんだか一瞬ネアから姉と同じ匂いがした。聞いてはいけない単語を聞いた気がした。

「・・・そうだね。」

あと二日ほど経ったらそうするか。姉を狙わなくても良いようだから、もうその理由を聞いて急いで知らせる必要はないだろう。

そうしてまた私は暇つぶしの本に視線を下ろし、ネアの手が再び私の髪を梳い始めた時。

ドンッ

「！」

「わっ！？」

一瞬の大きな響く・何かが激突したような音がした後。

・・・城が揺れた。

え？ え？ 揺れるものなの！？ そう簡単に！？

「伏せるアカシエ！」

「は、はいつ。」

庇う様にネアが被さってくる。数秒待つがそれ以上は何もなく、部屋の外が騒がしくなるだけだった。

「地震・・・ではないのか。何かあったな。俺は行ってくる。少しこ

こで待つてろ、アカシエ。」

「ちよ、待つてよ！ 私も行くに決まつてるでしょ！ 足手まといだけど！」

「駄目だ！ 何があつたかさえ分からないんだ、危険になるかもしれないだろ！」

「それはネアも同じでしょ！ 大体、いいの！？ 私はノウエルの城に一人で居るときネアに攫われたんだからね！？ 何があるか分からないっていうならこの部屋も同じでしょ、一人で居るほうが危ないってば！」

「・・・っ、分かった。」

「、わっ」

ぐい、と片手で抱えられた。・・・私そんなに軽くなかつただけど。特に此処に来てからはネアが無駄に美味しいお菓子ばかり持つてくるし・・・あああ、太つてゐる絶対！ しまった！

「しがみ付いてる。」

「ら、ラジャー！」

言われた通り自分の力で落ちない様にネアの首にしがみ付き、膝はネアの左腕が支えてくれた。

「行くぞ。」

「え、あつ、ちよっ・・・・・・・・早い早いっ！」

そして走り出したのだ。・・・全力疾走で。

城内を走っていると奇妙な目で見られたがお構いなしに騒ぎの中心であるらしい城門へと向かった。・・・ネアが。

揺れに酔いそうになるので、目を瞑ったまま目的地に着くまでじつと大人しくしていた。

しかしその城門——しかも正門だった——へ着いた時、私は啞然としたのだ。

え……？ なにこれ。何があつたの……？
でかい。かなり大きい大きい城門。此処がこの城の入り口であると
存在を指し示すように高い塀に連なつてあつた門が――

……壊れてた。正確には壊れて、外れて、倒れてた。地面に。

「ネア……これは夢だよねそうだよねそうに決まつてるよね。」
幻覚だ。幻覚が見える。見てはいけないものが見える。ここにある
はずのないものが見える。

「おい……っ、女だぞ!？」

「どついう事だ!？ ただの侵入者か!？」

「見るよっ……! 見てみるよっ、あの女……!」

いや、正確には「人」である。居るはずのない人である。

誰も見惚れるその美貌で人々の視線を集めたまま、さらりと金髪
を靡かせ倒れた門の上に仁王立ちした絶世の美女は言った。

「この私のシェイちゃんを攫つておいて……てめえら全員命は無
いと思え!……!」

おおおおお

「お姉ええちゃんん！!?」
見誤った。

姉が大人しく私の帰りを待っているはずなど、無かったのだ。

・・・あの口調は、本気で怒った時の証拠。姉の怒りは誰よりも怖いのを私は知っている。

姉の怒りに比べたら修羅も霞む。(後書き)

馬鹿でかい城門は、『BLEASH』ソウル・ソサエティ(漢字出て来なかった・・・)編で一護がじ丹坊(「じ」の漢字が出てこない!)と戦った時の瀟霊門を思い浮かべて下さい、大きさは。デザインはそれのちょっと豪華な西洋風の横開きの門です。

・・・あれ？ 分りづらい？ この例え。

事は知らずにして動く。きっかけは些細。

「美しい」のである。美しい者はどんな表情をしても様になる。だから、人々は——兵士さえも——見惚れるしかなかった。サラサラと靡く金髪に。私と同じ色をした、力強い大きな瞳に。白く全ての手本の様である肢体に。言葉を無くして見惚れるしか無かった。

全てが彼女の背景であり、全てが彼女の為にある小道具の様なのだ——ごめん、白状すると、殿下も。——だから、この場が静まり返るのも納得出来る。彼女の一人一人を見渡す視線に息を呑む故緊迫した空気になるのも納得出来る。ネアにしがみ付いた私に彼女の視線が唯一留まったが故その私に人々が注目するのも納得出来る。……姉を前にして平然としているネアには納得出来ないけれど。

だけど。

この場の誰一人として分からないであろう。
蒼い瞳が燃えるようにある時——それは、三途の川を見るときであると。……私が。

「シエ・イ・ちゃん？」

滑らかな発音で耳障りの最高に良い声で言葉が発せられ、私は反射で反応するしかなかった。

「すみませんでしたああああああああああっつー！！！！！！！！」

それは、此処最近で一番の大声であつたと自慢出来る声量だった。

「ふむ。噂通りだな。これなら納得出来る。リアターナ妃。お初にお目に掛かる、私はアル・イト・サハルエ。サハルエ国現国王だ。宜しく。・・ところでリアターナ妃とアカシエ殿は似ておらんな。」

「黙れハゲカス。誰もてめえの名前なんざ聞きたくないんだよ。ウチの子誘拐しといて暢気に自己紹介してんじゃねえぞ。」

「・・・ふむ。やはり姉妹のようだな。大変似ている。ラヴェンツ殿、2年振りだが、貴殿の国は大丈夫だろうか？ 花嫁選びに失敗したのではないか？ なんなら私が引きと・・」

「黙ってて頂けますかハゲカス。俺、ハゲに名前で呼んで良いと言った覚えが無いんだけど、どうしようリーテ。」

「そうね。やはりもう二度と喋れないように首の骨でも折ったらどうかしら。」

「・・・。・・ふむ。訂正しよう。実に貴殿に合う花嫁を見つけたようだな。」

「何か言ってるっぽいわよラヴェンツ。生意気だから頭皮ごと引きちぎってやろうかしら。」

「でも素手だと汚いからリーテ、俺手袋を借りてきてあげようか？」

「優しいのねラヴェンツ。でもラヴェンツに廊下を歩かせるほどの価値のある頭皮じゃないわ、それなら大丈夫よ。」

「何を言ってるんだよ、優しいのはリーテだろう。」

「・・・う、ゴホンッ。あー、失礼する。ところで聞きたいのだが、我が国自慢の城門、あれはどうやって倒した？ 何も道具や武器を持っていない様だったか。」

「うふふ！ 愚か者が居るわよラヴェンツ！ 説明したらショック受けるかしら？」

「国の王として受けないことは有り得ないんじゃないかな。」

「そうね。じゃあ説明してあげましょ。ハゲル工王、知ってる？」

何処の国の城にもカラクリはあるけれど、ここの国の場合城門だけではなく城壁まで全てが簡単に倒れてしまうスイッチがあるのよ？」

「………、は？」

「今回はその内の正門が倒れるスイッチ・紐を引っ張っただけで、実際私たちの労力はゼロね。あー、簡単だったわあ。」

「な、何だそれは！ そんなもの知らんぞ！ 何故私が知らずに居て、お前たちが知っている！」

「うっせえな。説明してやるつつてんだろ黙って聞いとけよ。・

それはね？ 余りにも楽で危険な仕掛けなんで、ハゲル工の5代目の国王以降は知らされなかったのよー。つまり100年以上前にその事を知る者は誰も居ない様になるはずだったんだけど……残念。」

私を知ってたわね？」

「……つ、何故！ 何故だ！ 何故部外者のお前が……！」

「それは、貴方が一番知っているんじゃないかしら？ ハゲル工王、シェイちゃんを攫った理由と、何も変わらないでしょう？ ……

あの一言で説明がつく。」

「……！」

(………)

という会話を、さつきから私の真横で繰り広げている三人。あ、私ですか。正直きっぱり言いますと姉の恐ろしさにあの時気絶しましたけど何か！ ……何か！

国家機密レベルの話をぼんぼん簡単に喋っているので気絶したふり

をしていたら思わず（不本意だ）聞いてしまったけれど、姉の言葉にふと僅かに笑うヘイカの顔だけは見た。

「……………」

「…ふん。まあいい。その話題はまた後しよう。ではノウエルがサハル工に攻めてきたとでも噂は広がるのではないか？　どうするつもりだ？」

「うーん。俺たち、どっかの馬鹿なハゲと違ってちゃんと考えてるからね。何人が部下を使つて『ノウエルとサハル工が友好条約を結ぶ為の余興として、正門を盛大に開ける』っていう内容の噂を流すように指示してあるから、大丈夫なんじゃないかな。」

「な！　友好！？　条約！？」

「断る？　断るの？　…良いけどね？　でもそしたら『サハル工が友好条約を結ぶ為に来国したノウエルを追い返した』なんて噂は広まって、一気にサラザモーラとラトヴァゼニア・その他諸国を敵に回す事になるだろうけど。」

ああ……。ノウエルは味方が多いから…。

用意周到、強いな殿下。

「くっ……………」

負け犬っぽい息をヘイカが悔しそうに吐き、盗み聞き（？）も案外楽しいかもしれないと考えた時。

「で？　起きたのねシェイちゃん。久し振り、お早う。」

……………ばれてた。

「……………お、おはよう……………」

につこりと一点の曇りも無い笑顔は逆に怖い。

「あの、お姉ちゃん？ もう、その怒ってたとかしてないの・・・？」

「あら、何に？ そもそもシェイちゃんは被害者じゃない。元凶には久し振りにちよつと汚い言葉遣い使って、色々仕返ししたし。その他にも八つ当たりしたからすつきりよ！」

『その他に、八つ当たり』・・・？

そこで私は気付いた。・・・ネアが居ない事に。

「おおお姉ちゃん！ あの、ネア！ ネアは！？」

「ああ、あのシェイちゃんの『恋人』の？」

ひいいつ。今「恋人」の単語だけ一オクターブ音程が下がった。怖い怖い、笑顔が！

「聞いたわよシェイちゃんおめでとう。お姉ちゃんが居ない間にそんなに成長したのね！ だから安心して、シェイちゃんの今後の為を思つて、全つ然危害を加えてなんかないから！ 害虫に！」

「う、うん・・・？」

少し目を逸らしながら青ざめている後ろの男性陣が気になる。

「あの、殿下。それでネアは何処に・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・医務室だ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうですか。」

何かもう全てを悟った。うん。お詫びの品も持っていこう。

そうして私は三人が居た部屋から出て医務室へ向かった。果物持つて。

上半身全部包帯で巻かれていたネアを見て、思わず青ざめて果物を落としてしまったのは仕方ないよね。

何をしたんだ、姉。

事は知らずにして動く。きっかけは些細。（後書き）

作者テスト週間に入りますので只でさえ遅い不定期な更新なのですが、

12月まで新たな更新は無いと思います。

申し訳ありません。

ハゲハゲ言ってごめんなさい。

お気に入り登録件数を見てビビりました。

本当にありがとうございますっ！！！！（土下座

ここをわたしたちは「いえ」とよんだ。(前書き)

私の力不足のせいでこの小説急展開多いんですね。
シリアス好きです。すみません。

ここをわたしたちは「いえ」とよんだ。

ノウエル国 サハル工国両国が条約を結ぶ事が発表され、
一足早く商人は互いに行き来をし始め

民は良い話に顔を綻ばせた。

そして、何故戦争中でもない「今」に「ノウエル」と「サハル工」
なのだろうか

首を傾げた者も少なくはない。

「全治二週間」だと医師に告げられたネアの元へ行く為の果物を籠
に入れて（多少懺悔の意味も含）部屋を出た。

今日は梨と蜜柑と街で買った——案外こっそり抜け出せた。やは
り此処の警備はおかしいに違いない。——シュークリームであ
る。見てたら手が勝手に伸びていくので早々と蓋を閉めよう。

有言実行の殿下と姉が半ば無理矢理条約を結んで三日。

結んだら結んだで何やら会議なので忙しいらしいのでまだノウエル
の者はサハル工に滞在したままだ。

ネアの実家が実はノウエルにあると聞いたので会おうと思えば会え
る事に安心。

部屋は元居た「無駄に豪華」部屋から普通の客室（まあそれも城だ
から広いのだが）へ移った。

（きつともうあんな馬鹿みたいに豪華ってか無駄金使ってる部屋に寝泊りする事は一生無いんだろうな……。ああ、そう考えると少し惜しい。うーん、駄目だな暫く贅沢をしないとどうも欲張りになっちゃって……）

（帰ったら私は城へ行くのだろうか……。お店楽しかったんだけどなー。可能性は無いに等しいけど一応良いかどうか聞いてみよう。城下に戻るのを。）

ぼんやりと心で呟きながら歩く。

（というか広いな城……。客間から医務室へはこんなに遠いのか……。？　もう随分歩いたような気がするんだけど……）

ふと前を見て。

右を見て。左を見て。後ろを見て。

（……………迷った）

知らない所に居ました。

変だなと焦ってもと来た道を戻ろうとするも、そもそもどこから来たのか分からないので完全に八方塞だった。ああ、私の馬鹿！人が通るのも期待するも、人影全く無し。窓によじ登って何処か確認しようかと考えるも窓は遥か上にあり。何だこれ新手のいじめか。姉の罠か。

仕方ないので前に進んだ。

あつれ、何か進めば進むほど暗くなってる気がする。それに地面段々斜めってない？　下行ってる気が……。いやいやいや、まさかね！　此処城だし建築ミスとかな訳ないだろうじゃあわざと造ったって事で。

こんな時に余計な感は冴え渡らないで欲しかった。

進めば進むほど暗くなって、少しでも肌寒くなって、いつしか柔らかい絨毯が引いてあった床は冷たい石造りに代わってた。足音が響く。それほど静かな場所が、人の集う王城にあるものなのか。

こんな時に余計な感は冴え渡らないで欲しい。

途中で引き返せば良かったものを。そう思っても進み続ける私の足も。

分かる、分かるよ。理解出来る。ああ、だけど解りたくないんだ。

——
ラウディ家の娘
——

——
ラウディという名は本来
——

——
何も知らぬ幸せな娘
——
その一族のみが
——

こんな時に思い出してしまうのが、癪なことにヘイカの言った事ばかりで。ヘイカは馬鹿で愚かだからこそ日常にさえ真実を含ませる発言をしていて。不覚にも私はその理由を——攫う程の訳を、サハルエの王族のみが知る訳を——知りたくて、だからその「言葉」を覚えていて。

泣かないでよ、私。

私の目から水分はよっぱどの時しか出ないんだから。

お姉ちゃん結婚式まで嬉し涙を取って置くはずだったのに。

普段の私なら恥ずかしがるだろう。
聞いて鼻で笑うだろう。
でも、ごめん。私こは、

【知ってる】よ――血が。

『アカシエ、いつか大きな物に接した時』

『大きな大きな理解しきれない程のものに接した時』

『もしそこを』――と少しでも感じるなら』

『その時は【帰ってきた】のだと』

『【知っている】のだと思いなさい』

『それは、アカシエが俺の孫である何よりもの証拠で』

『アカシエが【ラウディ】である証拠であるのだから』

『誇りに思いなさい』

『恥じることは無く、そこではお前も』

『――涙を流してしまうだろうから。』

その単語達は、他の誰も使っておらず私たち一族のみが使っていた事に、今更気付いて。

【ラウディの生き残り】も、【おじいちゃん】が発した【帰ってきた】も【知っている】も【ラウディ】も。

・・・ああ、ヘイカは【ラウディの生き残り】だなんて単語を一体

何処から知ったのだろうか。
全ては生きてきた、共に在った私たちだけの言葉。

「【・・・「懐かしい」よ、おじいちゃん】」

そこは石造りで。窓も無く。広大な、

教会で。

私たちの家で。

「【・・・ただいま】」

そして人々は牢屋と呼んだ。

「【こんにちは。】」
私が発した言葉に虚ろな目で振り向いた彼女の瞳に、徐々に光が宿る。

「【．．こんにちは。久し振りだわ、まさか生き残りが此処に来るなんて。ああ、今日はお祝いをしなくちゃ。】」

囚われの老女は喜んだ。

ここをわたしたちは「いえ」とよんだ。(後書き)

テスト終わったー！ わあい！

長期間(？)放って置いてすみません・・・。

そして行き成り意味分かりませんよね。はい、自覚しています。

お気に入り登録件数が500越えてました。

何かの間違いかと思いました。

ありがとうございます・・・！

世の中知らない事の方が多い。

前編

「始まりは、一人の末王子だった。」

老女は自身の記憶を辿りながら言った。何人も何人もと時代を超えて共有されていただろう記憶を。

「私は、やはりこの『突然変異』のせいか、そんなに記憶を所有出来ないんです。持っているのは、自分の祖父母の時までで。恐らく私の姉は全て持っているでしょうけど・・・。」

「ああ、そうだろうそうだろう。お前さんのその『髪』もお前さんが『二人目の子』である事も、全て例外と言って良いだろうからね。」

私の言葉に笑いながら老女は頷いた。

しかし私はその異例さが良く理解出来る。

何せラウディの家の者に生まれるのは必ず「一人だけ」で、必ず「金髪に蒼の目」で在った筈だから。

そう、記憶している。

老女は言葉を続けた。

「末王子は三代目サハル工王と美しい愛妾との妾腹で、大した権力も地位も持たずにひっそりと暮らし、生涯を終えるはずだった。しかしそれは叶わなかった、その暮らしを壊してしまう程に末王子は美しかったから。人の目を引き付ける穢れの無い金に、海のような蒼の瞳を持っていたから。その母も同じ色であつたけれど同じ色でも圧倒的に違っていた、その色の「存在感」が。人を引き付ける存在であつた。」

人々が余りに末王子ばかりを持て囃すので、王位第一継承権を持っていた長男は面白くなかった。

不快で、不愉快で、日々増す感情を到頭制御出来なくなってしまうた。

彼は一時だけ狂った。

自らの異母兄弟に暗殺者を向けたのだ。

闇夜に紛れて忍び込んできた輩に気付いた途端、末王子は長男の仕業だと、自らの義兄の仕業だと悟った。

末王子は周りの人々も自身の中途半端な権力も立場も煩わしく思っていたから暗殺者の攻撃を態と軽傷である様に受けて城から去り、二度と戻って来なかった。」

それがラウディの始祖である彼の話だった。

続くはずの残りの始祖かれの生涯ものがたりを老女は躊躇い話さないのじれったくて続きを促した。

「【それで、続きは？】」

「【いや、話すことは出来る。出来るのだが・・・、始祖かれを軽蔑せんかと心配で・・・。】」

「【軽蔑？】」

「【・・・言ってしまうおう。どうせ話さなければならぬ事で、これ話をしなければラウディの血が何故早々と始祖かれの代で絶えなかったか、謎のままになるからな。】」

「【はあ・・・。】」

「【片親でもラウディであれば、その夫婦の間に生まれるのは必ず一人だけであり、どの民族と契りを結んでも片親だけでもラウディであればその子は必ず金髪に蒼の瞳である事は知っているな？】」

「【はい、それは知っています。】」

「【うむ。まあ結果から言えばサハル工王さあやの血を受け継いだせいか、始祖かれは大変な遊び人であったのだ。】」

・・・。

「【あ、遊び人・・・？】」

「【恋人というか、事実的な妻が追放された身であるというのに50人前後居ってな・・・。】」

「【・・・。】」

それは遊び人という言葉だけで済まされるレベルなのか。

「【まあ当然と言えば当然でな、子供、つまり子孫も50人前後でラウディは同じ血の者同士自然と集まりたがる民族であつたから、その子供や孫たちはゆつくりと集まり結束し民族となつた。】」
全員、同じ髪色と瞳を持つた。

「【美しい民族であつたから、馬鹿な者共に捕まえられ虐げられる事も多くてな。やがては遊牧民のような者たちになつた。国中を転々とするな。】」

しかし、より特殊だつたのは後にラウディ・・・『家族』と名乗るようになった私たちは、圧倒的な記憶力を持っていた。

私とは違う意味での「突然変異」であつた始祖^{かれ}は人の記憶を受け取り、引き継ぐ能力があつたから。

「【なんだい、知っているのかい。】」

「【はい、この能力が彼の子供の代からは自らの民族の記憶のみと限定されるようになった事は。】」

「【そうか、そうか。まあお前さんはそういった基本は知っているのだらう。】」

「【その能力は徐々に強まっていき、同じ血を持つ者同士顔を合わすだけで相手の持つ記憶の全てを共有出来るようになったんですね？】」

「【そうだ。お前さんにその能力は無いのだらう？】」

「【無いですね。臆ろげながら本当に祖父母の記憶までなんです。同じラウディと会つたのが自分の家族以外で貴女が初めてなのでよく分かりませんが。】」

「【なるほど。しかしこうして長く話していればゆつくりと相手の言いたいことが映像で流れて行き察する事は出来るようだな。まあ、

突然全てを所有してしまうより理解しやすくて便利かもしれん。】」
納得したように頷くと同時に彼女の姉と同じ色をした金髪が僅かに揺れる。

「【続きを】」

再び老女の言葉がこの静かな「いえ」に響く。

遊牧民として転々としながら生きてきたラウデイだが、その能力と出生が26代目のサハルエ王に知られてしまった。

始祖の子供の内かれの一人が、密かに能力を利用して細々とその血を城で永らえていたのだ。

同じ血を持った者による密告であった。

城にラウデイは捕らえられた、民族の52人全て。王がその能力と容姿を上手く使おうとしたから。

迂闊だったのは、能力を知らながらラウデイの裏切り者ぶかと捕らえた者達を会わせてしまった事。

顔合わせをした途端、互いの持つ記憶を全て彼等全員は共有した。

自身たちの成り立ちと、沢山の生涯と、家族と、今に至るまでを。自身の成り立ちと、孤独な家族の生涯と、城での豊かな暮らしと、サハルエ王族と城と国の秘密の全てを。

それをきっかけに「裏切り者」は民族の一人へと加えられる様になったのだが、

同時にラウデイの民族が自由を無くした瞬間でもあった。

王は言った。

「他国にお前たちを利用される訳にはいかない。

捕らえよ！

そして、城の奥へと閉じ込め二度と出すな！」

王の王としての過ちを言えば、

「ラウディを殺す」という最も危険が無くなる対応を世間体などを気にしてしなかった事と

自らの欲に負けて民族の中で最も美しい18の娘を王が変わる毎に生贄として差し出す様、

約束をした事だった。

世の中知らない事の方が多い。

前編（後書き）

ううむ。

私の文章力不足で、分りづらい・・・かも・・・。

難しいですね。

何か確か江戸時代の・・・將軍もお子さんが50人前後？ 数え切れ
ない程居たんじゃありませんっけ。

まあいつか。

前編です。

ラウディの成り立ち

「【彼等は、生きた。】」

いえに老女の声が静かに響く。重みを持つて。

そうだね、彼等は、わたしたちは、生きてた、絶望を味わって、籠の中の鳥になろうと、生きてた、そう、

「【此処で。】」

老女が両腕を左右に広げた。布が擦れる音と同時に細いやせ細った腕が見える。

恐らく「落ちこぼれ」なのであろう私の能力も、彼女の強力な意志のお陰か次々と「記憶」を伝達させていた。流れ込んでくる、沢山の人生に私は涙するべきなのか。

教会であり、牢屋であつた此処は確かに捕らえられたラウディが暮らす、

「いえ」だつたのだ。

一族は皆戸惑い、絶望した。

一体どうしたのかどうするべきなのかどうすべきだつたのか。

けれども彼等の長所を上げれば、悪人という悪人は居らず、皆仲良しで、そして自身の持つ共有している「記憶」を冷静に観て判断し情報を得る頭を持っていた事だつた。

「私たちは恐らくもう、外の光を見る事はない。」

当時の族長であつた爺・ルパは言った。

動揺は無く、いつも通りのしつかりした声だつた———そう記憶している———。

「だが、此処で生まれた次の子達には私たちの記憶は伝達され、受け継がれる。どんなに時が掛かろうと、必ず出る時が来るであろう。その時の為に私たちが出来ることは、」

ここで生きる基盤を、

出来る限りの情報を、

王は死に変わるが私たちの記憶が無くなる事はない。

・・・彼等の武器は何よりも正確で膨大な情報だった。

元は教会があつた所に城を建てたサハル工初代王は、この立派な教会を壊すのは惜しいと、教会自体を取り込む様にして巨大な城を建てた。

しかし最奥にひっそりと建つ不気味な所に人はやがて近寄らなくなり、完全に途絶えた。

大きな祭壇、綺麗な壁、太い柱。

それらは全て時と共に風化していくからだ。手入れされていなければ尚更である。

彼等は「いえ」を掃除し、脆い床を剥がし露になった土を耕し始めた。

教会は広がった。

窓こそは一つも無かつたが、部屋の数には膨大で一人一人に与えられる程だった。

水もあり、トイレもあり、台所もあり、風呂もあった。

錆付いていたり壊れていたりしていたが、先祖から受け継いだ知識が役に立たぬ訳が無い。

王は生きる為の物資は頼めば多少であれ支給してくれたので、

やがて教会はいえになり活気溢れる村の様になつた。

貰った種は大切に耕し野菜を育て、貰った数匹の家畜は大切な食料で子を産ませていった。

水は城の水道がいえまで機能しており、心配は無く存分に使用した。

「【生きていける、と皆笑った。

どんなもんだ、と笑ってみせた。】」

そんな時に忘れていた事を、伝えられた。
それは王の欲望の約束。

——「明日、一番美しい18の娘を王に差し出して貰います。

」

当時最初に「生贄」として差し出されたのは、約束通り18の最も美しかったシアという娘だった。

そして、いえを出た後一度皆と面会しただけでもう二度と戻ってくる事は無かった。

「【・・・という、物語の様な悲劇を見事演じてみせた。】」
それも嘘。偽り。彼女は度々会いに来た。

一族間の「いえ」での約束。美しい娘にだけ課せられた約束。
生まれた娘は必ず長に言われた。

【もしも贄として王の下へ行く事になった者は。

絶対に死ぬな。王の傍で生き続ける。

出来るだけ多くの事を知れ。外の現代^{いま}。王の事。城の事。人々の事。

進められた知識。

それを持って私たちと再び顔合わせするだけでいい。

「懐かしくなった、頼むから会わせてくれ、一度で良いから・
・」

公式に会おうとしなくてもいい。隠れて会いに来てくれれば
いい。

お前達の役目は、情報を伝えること。その媒体。
良いか、生きてくれ。

」

残酷だった。

置いてく方も、置いていかれる方も。

娘たちに拒否権は無かった。いや、「嫌だ」といえば他の者と変わる事は出来た。彼等一族は鬼ではなかったから。出るのが少し伸びただけだと、笑って許しただろう。

けれども一人として拒否しなかったのは。

一人娘であろうと、恋人が居ようと、決して誰一人拒否しなかったのは。

「……出来ると思うかい。

生まれてくる子供は物心つく前から膨大な記憶を持っている。

親や大人達が説得する必要がある程に、彼女達は記憶と共に沢山の意志と心も知っていたのだ、幼い頃から。元の自由な暮らしの楽しさ、世界の広さ。裏切りの悲しみ。捕らえられた時の無念。

「……そして、子孫に託した先祖達の想いも。」

皆笑顔で「いえ」を出て、外の情報を得て、それを共有し着々と知識を蓄えていった。出る為の、知識を。

やがてそれを繰り返す内に彼等は、自分達が殆ど忘れられた存在であることに気付いた。

見張りも居ない。人影など皆無。王たちに分かっていたのは、どこからか現れ献上される美しい娘の事だけ。

迷路の様な城の構造も、贅となった娘達の伝達により全員が全てを把握していた。

出る時だった。

いえで生活を始めてから、数百年経っていた。

最初運動神経の良い若者が五人、外に出た。

人の居ない時間・・・それも夜であれば容易かった。容易い事を、知っていた。

その内一人が再び城へ戻り、一族に出る為の道順の記憶を伝えた。外に出た若者は、大移動の為の準備をこっそりしていた。

最初に出たのは、老人達。簡単に成功した。馬車でひっそりと遠くへ運ぶ。

次に、子供。それに同伴する母親。

父親達は出来る限りの食料と衣服、金目の物担当。

最後の家の始末はこれも活発で運動神経の良い、若者の仕事だった。書物や文字のあるものは昼間にゴミと共に燃やしていた。自分達の情報をなるべく残さない為に。

いえは、教会は綺麗に片付いていた。

さあ、私たちも出ようと廊下に出た時。

運が悪かった。

「誰か来てくれっ！！！」 脱走だ、教会のラウディ共が脱走しているっ！！！」

たまたま気分で滅多に來ない奥まで來ていた見回りに、見つかった。

ラウディは確かに殆ど忘れられた存在であつた。———そう、目立つた事が無い限り。

追い掛けてきた兵にそこに居た若者の殆どは斬られて死んだ。残りは命からがら逃げ出した。しかしそれも、数名だけだ。

ラウディの逃亡を知つた当時の若き王は追つ手に命令した。先に逃げ出した老人も子供もその母親も父親も全て殺せと。何せ目立つ美貌がある。見付けやすかつた。

今まで彼等が生きながらえていたのは先王達の欲望と迂闊さのせいであると聡明な若き王は知っていたのだ。

ラウディの血は途絶えたも同然だつた。

極数名の若者には逃げられ、生かしてしまつたものの、ラウディの子は一夫婦に一人である事も王は知っていた。王の勝ちだつた。

それが現在^{いま}、ラウディの者が片手に収まる程の人数しか居ない理由^{わけ}。

——しかし若き王は気付かない。

自身の祖母がラウディの娘であった事に。

自身もその血を受け継いで居る事に。

祖母やラウディの者と対面した事が無かった為、自身にも能力がある事に。

自身が殺したのは、紛れもない同胞であった事に。

気付く事は無く、彼は年老い、死んでゆき、歴史の王として名を刻まれた。

世の中知らない事の方が多い。

中編（後書き）

重い。暗い。

そして書いてから気付く。

・・・主人公喋つとらん・・・。

——ある少女の生涯の裏切り。

——私たちは、朝日を浴びて目覚める事はない。

「レリアー！ 起きろよおっ、今日は一緒に鬼ごっこしてくれるって言ってたろっ！」

半泣きの声で無礼にも私の（仮にも女性である）部屋の扉を開けたファイーは、私を起こそうと精一杯揺さぶってくる。

うむ、頑張りたまえ少年。5歳児の力などだが知れているものだ。余裕で二度寝をしようとしたら、頭が在り得ない程の衝撃を受けた。グワァン、と音が響く。

私は飛び起きた。当然だっ、このっ、

「糞 餓 鬼iiiiiiiiiiiiっ！！！！！ 許さんぞ、フライパンで女子の頭打ん殴るとはどういう了見じゃコラアアアアアッ！！！！ しかもまだ4時じゃねえか、どんな早朝鬼ごっこだ阿呆！」

当然ファイーは真っ青になって逃げ出していくので、望まずとも自然と早朝鬼ごっこになる。

「ひiiiiiiiiiiiiっ！ ぐごめんなさあああいつ！」

「ごめんなさいで済むと思ってたのかっ！ 下手したら死んでたぞっ！」

「レリア、ファイ！ 五月蠅いぞ朝っぱらから！ 皆寝てんだ、追いかけてこなら広間行つてやれっ！」

可笑しい、何故私も怒られている？

しかし向こうは何も悪くないので赤ん坊の頃から面倒を見てやって
いる糞餓鬼の首根っこ掴んで——元は礼拝堂と言われていたで
あろう——広間へ行く。

「さて、反省会をしようかファイ。人を起こすのにやっていい最
大の手段は、冷水を掛けるまでだぞ。フライパンは最高に目覚めが
悪い。分かる？」

そうして私は意識を集中させ、ついさっきの起こされた時の記憶を
態と濃く、濃く送り込んだ。

私たちラウデイが持つ「記憶」の能力には二種類ある。

一つは純粹に記憶のみを伝えるもの。

もう一つは記憶と同時に持ち主がその時感じた意志や心、感情も共
に伝えるもの。

殆どは後者で、前者は扱いが難しいのだ。

ファイには私の痛みと不愉快さを強調させて伝えた。

さすがに理解出来たのか、しゅんとして謝る。

「ご、ごめんなさい……。まさかこんなに痛いと思わなくて……」

「馬鹿、殴る前に想像するべきだ。フライパンなんか痛いに決まっ
てるだろう。ほら、思い出して。ファイの曾祖父の祖父の記憶。
悪戯で仕掛けられたたらいが上から落ちてきた衝撃もかなりのモノ
だっただろう？ 今度から気をつけるんだ。」

私たち一族に秘密や隠し事が出来ないのは正直面倒だが、こういう
時便利である。

「う……。っ、うえっ……。っ」

……。あ、やべ。泣き出す。

そう察した途端、救世主の声。

「レリア、その辺にしてあげたら？ ファイも、悪い事だって分

かったものね？ お利口さんだから、ね？」

「ユエイ！」

私の親友である。

私は彼女が大好きだ。

「ユエイユエイッ！ 随分早いな！ 今日畑の光当番だったのかっ！？」

飛ぶようにして抱き着きながら問いかけた。

ちなみに光当番とは、此処には窓がない為代わりの光を早朝に付ける係である。

「そうなのよー。もう、眠くつて。レリア、手伝ってくれない？」

「えー。まあ、いいけど。殆ど終わってるじゃないか。」

「頑張ったもの。でも、早起きは三文の徳って本当ね。さっそくレリアに会えたわ。」

「！ ユエイッ！ 大好きだっ！」

彼女は特段に可愛いので、そんな事を言われたら悩殺モノである。ふふ、男共に自慢しようぞ。

「レリアもユエイも！ ぼくのこと無視しないでよー！」

「ああ、ごめんごめん。ついラブラブタイムに入っちゃって。ほら、部屋まで送ってくよ。」

むすつとしたままファイは差し出した手を握った。

「じゃあ、また昼にねユエイ！」

「ええ、また！」

「ただいまー！ あ、丁度朝ご飯？ お父さんとお母さん、今日家畜の世話？」

「そうなの。ほら、レリアも座って食べちゃいなさい。」

おお、私の大好きな目玉焼きだ。卵は余り食べられないのである。朝から豪華。

「レリア、さっきの騒動は何だったんだ？」

「うん。ファイと鬼ごっこかな。」

「あら、ファイくん、ついこの前はいいしたばかりだと思っていたのにねえ。」

「すっかり悪餓鬼だと、ファイママに言っておいてよ。ああ、それにしても卵美味しい！」

「ほんと好きねえ。あ、あなた。もう時間よ行きましょ。」

「おや、本当だ。じゃあれリア、食器頼むな。レリアの今日の当番は何だ？」

「私は今日は夜の消灯係だから夜まで何もない。ユエイと遊んでるよ。」

「分かった、じゃあな。」

腕を組んで出て行った両親は相変わらず仲良しである。

たつぷりユエイと遊んでいたらあつという間に消灯の時間になってしまった。ううむ、一日って短い。

消灯係は二人ずつ。

もう一人は今日誰だったかなあ・・・。

「レリア！」

「、わ。タオ！」

背の高い男が後ろに立っていた。いつの間に。

「久し振りだなー！　なんか暫く当番一緒になる事も無かったし、すれ違いもしなかったもんな！」

「わっ、馬鹿！　抱きつくなっ！」

勘違いしたくなるだろうが。

「ちよつとやめとけてば！　それだからユエイに誤解されてフラれるんだよアンタ！」

ユエイのタオの認識は「はつきりしない男」「本心謎」「浮気性？」

・・・など、良いものが一つもない。

「え、それは困るなあ。」
そう言つて照れ笑いしながらあつさり腕を離すこいつを、殴りたくなるのは仕方ない事なのだと思う。すれ違いもしなかったのは、避けてたからに決まつてるだろ馬鹿。本当馬鹿。嫌いだ。
さつさとくっ付けばいいのに。
それが私の為になるから。

—— そんな愛おしい日常に、知らせは突然来たのだ。

「ユエイが、贅になるかもだ、つて・・・？」
確かに彼女は愛らしい。私の大好きな彼女。親友。

「何で・・・。何で！」

「俺に言うなよレリア！」

タオは泣きそうだった。当然だ。自分の好きな女の子が、贅に、な
んて。

私はその日生まれて初めて彼から頼まれ事をした。

「ユエイを、助けてよ・・・、レリア。」

君からだとか残酷になるその頼みは、私の願いでもあり、私にしか出来ぬ事だった。

「ユエイ！ 贅の話、本当！？」

「・・・本当よ。さつき、長から言われたの。」

こんな痛々しい彼女の笑顔を、私は見た事がない。

しかし小さな小さな呟きを、私の耳は捕らえたのだ。

「最後に、夕才に挨拶しなきゃなあ・・・。」

——ああ、もう。君たちは。

「誰にも知らせず。誰にも何も言わず。ひっそりと出て行く。・・・それで、本当に良いんじゃない、レリア？」

「はい。贅が変わるだなんて、私の無理なお願いを聞いて下さってありがとうございます、長。」

だってユエイは贅として、脆すぎる。柔らかすぎる。優しすぎるから。

そして、ユエイの想いと夕才の気持ちを私は知っているから。

「最後に、ラウディと言う事は、何も無いか。」

「・・・そうですね。」

・・・特に、何もあります。」

幸せだったから。

呆気なく来てしまったラウディとしての最後。

「それでは。」

私は、敵である王の下で生涯を終えようか。
笑顔を見せて、いへの扉を閉めた。

「あつ、レリア様ー！ 陛下がお探しでしたよー！」

「えっ？ 本当か？ デイルにはちゃんと庭に行くって言ったんだけどなー。分かった。ありがとう！」

「いいえー！ 我が国のお后の為ならばー！」

「やめる馬鹿ー！」

私は毎朝、日の光を浴びて目覚める様になった。

「レリア、俺を愛してくれているか？」

「やだなデイル。今更だ、当たり前じゃないか。・・・愛し、ている。」

正確には、「愛してしまった」、「なのだろうか。

嗚呼、御免なさい。御免なさい。

私は敵であるはずの、私たちを閉じ込めたままの王を
愛してしまいました。

嗚呼、御免なさい。御免なさい。

私は貴方に秘密で、今でも仲間に情報を渡しに行つて
いるのです。

実際の朝日は、記憶よりもずっと眩しかった。

——ある少女の生涯の裏切り。（後書き）

番外編。

どうしても書きたかった視点です。

世の中知らない事の方が多い。

後編（前書き）

久し振りの更新です！。

「【と、いう訳じゃ。】」

深刻なムードは一体何処に、老婆はけらけら笑って手を叩いた。

「【え、えっと・・・？ あ、今の結構重い話じゃありませんでしたっけ・・・？】」

「【重いのを。しかし、昔の話じゃ。昔、の。今現在愚王達は死に、残ったのはラウディの血をひいているという自覚のある賢い王のみ。いつまでも昔の事をズルズル引きずってたら切りが無い。何処かで区切らにや。】」

ズルズルがやたらリアルな音だった。どうやって出したんだ、オイ。一瞬床を這って来る化け物の幻覚が見えたぞ。

何処かの尊敬するに微塵も値しないヘイカについての評価は聞き流す事にした。

おそらく、何処か違う王もしくはこの人の勘違いだろうそうに違いない。

「【ラウディの、血をひいているというのは本当ですか・・・？】」

「【本当じゃよ。お前さんも会っただろう、あの猫目の小僧に。遠いが一応親戚だよ。】」

うわあああああ。

やつぱり王ってヘイカの事か！ さっきの推測は後者だな！ 誤っ

て「賢い」とか認識しちゃったんだなきつと！

ていうか「親戚」って。「親戚」って・・・！

「【・・・消えたい・・・】」

そこまで言うか！！？ と文句を言う声が聞こえてくるようだ。うわあ、無いわー。本当無いわああ。本気で凹む。この急激なテンションの落下を誰かどうにかしてくれ。

「【贅から何があつたのか知らんが王妃にまで上り詰め生涯を終え

た子が居てのー。まあ、気が強いけど美しく優しい子だったから、王に何かやらかしたんじゃないかな。その子の血が、この国の王族に混ざっているからの。立派なラウディじゃよ。」

「【じゃ、じゃあ、今のヘイカは何で自分の能力に気付いて・・・で、あ。そっか。あの長髪猫目、貴女に昔あった事があるんですね。】」

「【昔鼻垂らしながら泣いて迷ったのー。基本的に何かに惹かれるのか、此処へ来るのはラウディの者だけのはずなんじゃ。】」

「【なるほどー。で、鼻垂らしながら泣いてたんですね？】」
良い事を聞いた。後でネタに使う。決定。

「【今日は生き残りの子孫・・・お前に会えて楽しかった。もうラウディは王族として守られてきた猫目だけかと思っと思ったわい。】」

「【こちらの良い経験となりました。ありがとうございます。それで、その、私は間違いなくラウディだと思うのですが、この茶髪は・・・。】」

「【ふうむ。恐らく、揺れなかったラウディの血脈が揺れ始めた証拠じゃろうな。いい事だよ。】」

ラウディの能力も、血の子孫の特徴も、もう不要なものだ。」「
願望を言えば美形だという点は似ていたかったです。本当に。切実に。」

「【お前さん達の代の子孫からは、能力を受け継がない子供が出てくるだろう。お前さん、好いてる者は居るかい？】」

・・・あー・・・忘れてた・・・。

ネア、今ばっちし怪我人だね（姉によって）。思い出したら、髪を弄って貰いたくなる。

ラウディの血脈が揺れ始めた、証拠の。

じいちゃん似の茶髪を。

ふわりと撫でて貰いたい。

「【では、私はもう戻ります。】」

「【氣をつけて行くんだよ。】」

「【お婆さんも、一人暮らし？ お氣をつけて。】」

踵を返し、わたしたちの「いえ」を出た。

「【お婆さん！】」

おっと、聞くのを忘れていた。知っていなきゃ不便だし、些か失礼だもんね。

「【あの、お名前は！？ どうして一人だけ此処に居るんですか！？】」

「【秘密。】」

・・・。

え、ええええええ。即答されたよ・・・。

「【ええっと、じゃあ、名前だけでも・・・】」

「【仕方ないのう。お前さん、案外我が侘だな。】」

あれ？ 私我が侘になるのこの場合？ 納得いかないけど取りあえずすみませんこうなったら何か意地でも知りたくなるんですけど。

「【リドシー、じゃよ。】」

「【古語ですね。意味は何でしたっけ・・・えとー・・・】」

「【どうでもいいから早よ行きなさい。猫目の小僧と、お前さんの姉さんにも宜しくな。】」

「【あ、はい。では、また。】」

足で元来た道を辿る。

暗いし不気味だけれど、来た時に比べたら全く怖くなかった。

（戻ったら真っ直ぐネアの所へ行こう。）

（リドシーの意味・・・なんだっけ・・・）

再び一人になった老婆は、広間きょうかんの椅子に座って目を閉じた。
口元だけで笑う。

（ああ、そうだ。確か意味は、）

「【私の役目はこれで終わりかな・・・？ やれやれ、長かったの
う。】」

息を吐き、体の力を抜いて、

（『伝達者』だ・・・）

そのまま起き上がる事は無かった。

「シェイちゃんんんっ！ もうっ、何処行つてたの！？ もう夕食の時間よ！？」

「うぷっ。ごごごめんさい。わああっ、拳に着いた血は何！？」

「あ・・、カスが私のシェイちゃんを隠したのかと思って一発殴つてきちゃった・・」

「何そのお茶目な感じ！？ カスつて誰！？ まさかネアじゃないよねっ！？」

「さ、夕食よー？」

「お姉ちゃんんん！！？」

世の中知らない事の方が多い。

後編（後書き）

シリアス無理矢理終了。主人公喋らすと自然とコメディになる。何故。
期末という名の大敵を倒し終わりました。

閑話 お店（前書き）

25話で一章とまではいかないけど
何となく区切りがついたので、閑話。

閑話 お店

姉妹二人で経営する小さな飲食店。

その生活をしていた頃（まさか姉が玉の輿になるとは思わなかった
ので）、役割は料理と接客、二つある為その役割は交代でこなして
いた。

男性客が多い店で、接客当番が妹の日。

彼女はまさにどっかの国のヘイカが見たら気絶するような、
そんな人当たりの良い笑みを浮かべて接客していた。

「いらつしゃいませー。」

聞こえた声が金髪の持ち主ではない事に気付いて入ってきた客は舌
打ちした。

案の定、メニューを持って来た女は茶髪だった。

ああ、しっかりと今日はどちらが接客か確認しなかった俺が悪いさ。
それは分かるがイライラする。

なんせ、ここにはあの美貌を見るために来ている様なものだからな。

来た意味が無いのでさっさと帰れるよう、適当な飲み物のみを注文した。

少し経ってからやはり茶髪の女が手にコップを持ってやってくる。

「お待たせいたしました。」

一定の笑顔で言われ、何だかそれが無性に腹が立ったので、悪戯をする事にした。

「姉ちゃんの方を毎日接客にした方が売り上げも上がるんじゃないのか。」

「はい？」

僅かに首を傾げた茶髪女の笑顔はそれでも崩れず、続ける事にする。

「君の接客の日は、姉ちゃんの時より売り上げが下回るだろ。」

「……………」

図星なのか何なのか、相手が黙ったのをいい事に更にイライラをぶつけた。

「いやあ、俺も残念だよ。折角足を運んだのに今日の接客はハズレの方だったからな。」

少しばかりすっきりしたので、口元に笑顔を浮かべて頼んだ飲み物

を飲んだ。

ひやりと冷えている。

黙っていた女は、やはり一定の笑顔を浮かべて言葉を発した。

「うふふふ。お客様だったら、お生憎、今日は私なんですよ。
明日も来て下さったら姉ですけどね？」

この制度は店で決めた事ですので、私の接客で不満がありますよ
うなら、テール街にでも足を運ばれたらどうですか。」

訳

悪かったな私で

文句言う位ならその「姉ちゃん」が当番の日の明日も絶対来いよ
っていうか接客する女に個人的趣味として場違いのケチつけないな
らテール街（大人の男性方が主に通う、娯楽街。大人な街です）に
でも行けよバーカ

「・・・・・・・・。」

厨房の方からもうどうしてか殺気を感じたので、俺は半分も飲んでい

ないそれを残して店を後にした。
八つ当たりは、良くないな、やっぱり。

その後何故か町で俺は若い女子たちに「エロ親父」と蔑んだ目で見られた。

そんなある日のお話。

嫌よ嫌よも嫌のうち。

普通に廊下を歩いてたらヘイカに捕まった。

「まつ、待つて・・・！ ネツ、ネアが来るよ！」

いいの！？ という意味を込めて睨みつけられ、少し思案した後彼は「かまわん」と呟き、より一層近づいてきた。
くそう、息が掛かるっ！

「だだだだめだつてば！ 全然構わなから！」

馬鹿なのこの人！ 自虐的なの！ 初耳！

「好きなものは何だ？」

す、とまた近寄る。ダメだつってんのに・・・それ以上近付いたら、私は・・・！

「好きな色は？ 好きな景色は？」

両手はとづくに私の後ろの壁にある。体格の差を利用したの？ そうなの？ でもいざという時は姉秘伝の技を使えばいいんだけど（
「急所蹴り」）。

何も言わない私に、目を細めて威嚇するような低い声で呟く。

「好きな、男は・・・・・・？」

本題はそれだろーが！ 最初っからぱと言えよ！ っていうか逃がさない為なんだろうけどこの体制意味無いでしょだつて答えは分かりきつてるもの！

「そんなの、決まってるでしょ！ お姉ちゃんの好きな人は殿下だつて！」

見てたら嫌でも分かるのになに今更！？

眉を歪めたクソヘイカの顔がまた近付いた。

ああ、だからダメなんだつてば本当に・・・！

「きつ、キモイ・・・！ 生理的に無理いい！ ははは吐つ・・・、
うえええええ。」

ほら本当に吐いちゃったじゃああん・・・！

乙女（一応）として許しがたい自らの行為と吐いた衝動で、泣きた
い。いやあ、私、自分でもびっくりする位嫌いな人がダメなんだな
あ。しみじみ。

「・・・ほんと・・・清々しい位に出会いたくもありませんでした
よヘイカ。まあネアと会えたことのおまけとして、存在は認識して
差し上げますがね。」

「きつ・・・貴様本当に吐くか！？ 人と（それも特定の。むしろ
俺的な。）近いってだけで本当に吐くか！！！！？」

「ああ大声を上げないで下さい。最近は声を聞くのも何だか不快で
して。それともこの国の王さまは人と話するときいちいち声を上げる
んですか？」

「何故突然他人行儀！ 一応身内だろう！ まあこの私とは果てし
なく遠い血筋だがな！」

「やめて下さい反吐が出・・・。。
最初に身内扱いしなかった誘拐犯は一体何処の誰ですか？ ああ、
時間が勿体無いですね。いやあ、万が一の時の為に使い捨て袋持っ
てて良かったー。じゃ、さようなら。」

たぶたぶした（下品とか言わない）ヘイカのせいで外に出てしまっ
た朝食たちをゴミ処理せねば。

乙女として。乙女としてね。むしろ人として。

「待て、私はまだ話がある。」

ぱし、と腕を囚われた瞬間に八工の様にその手を叩き離れた。ちな
みに勢いは常に全力である。

あー、手え赤い。かわいそー。（棒読み）

「私は無いんですー。残念ー。」

「・・・っ、待て！」

だから私は妹の貴様に相談しようとしているのだ！

どうしたらリアーナ・スー・ラウディを上手く騙して誘拐してそれに乗って少しでも痛めつけてから他人の妻に出来るのかということとを！」

ヘイカは廊下でやはり大声で叫んだ。

おばあさん、この長髪猫目はやはり賢いのではなく、ラウディとかなんか難しいことは理解していなかったただじゃないんですか。そうですよ？ もうそれで良くないですか？ うん、そうしよう。私は呆れた目で予想通りの展開を眺めた。

「俺の・・・リーテを・・・何だって？」

声以上に低いですよ未来のお義兄さん。あと一国の次期国王が他国でその国の王の首に剣とか突きつけていいんですか。

いつもは隠れてヘイカを守ってる近衛の人たちが思わず廊下の影から身乗り出しちゃって戸惑ってるよ。気持ちは分かる。悩め、青年たちよ（？）。

「あの金の髪に、触れていいのは俺だけだよ。知ってるよね？」

殿下の後ろに居た姉が照れたように笑いながら「勿論よ、もうっ、ラヴェンツったら！」って言ってる。

恋とは無縁だった人たちが本気になっただけなら凄いいよね、色んな意味で。

「アカシエ、どうした？」

後ろからネアがやって来たので、さっきの嘔吐事件の体勢を告げ口しようと思ったが、流石に好きな人に吐いたとか吐いたとか知られたくないなので誤魔化した。

袋は窓からさつと放り投げ。ごめん、後で拾う。

ヘイカは既に命の危機を感じたのか、涙目である。

……弱え……

そんな自国の王をぼんやりと見つめた（いいのか、助けなくて。あれ結構危ないと思うよ。）ネアは言う。

「そっぴや陛下……。日記（執務室の机上で開きっぱなしなので随時公開中。）に書いてたな……」

『最近私は王なのにやたらいじめられる。N国は鬼畜だらけに違いない。いつか報復しよう。』と……。』

それ、威厳無いんじゃないでしょうか。

しばらく沈黙。

私はそんなネアに、元気を出してと肩を叩いてあげた。ほんと、どんまい。

私たちがそうしている間にも最強コンビに責められ生命の危機を感じ取ったヘイカは言い訳するように叫んだ。

「わっ、私とてそんな他人の女でしかも性格極悪の女など、身内といえ関わりたくもないわ！

しかし仕方がないだろう！

帝国から我が国を責めない条件としてラウディの女を差し出せと言われているのだ！」

……なんか、今、凄い事言わなかった……。？

「私はこの国の王だ！　民を守る義務がある！　益もない戦争など意味がないだろう！　しかしもう後が無いのだ！」

そう叫んだ時のヘイカはちゃんと陛下に見えた。
 ・・・つて、待て待て待て。その情報、今此処で言っていていい（というか叫んでる）レベル！！！！？

「だから誘拐したというのにいいいいいいいいっ！！！！！！」

悔しそうに言ったヘイカに私は、

「アホかああああああ！！！！！！！！」
全力でツツコんだ。
計画なさ過ぎだろおお！？

まさか今頃になつて誘拐理由が分かるだなんて、誰が思ふのか。誘拐したはいいものの、間違えるし誘拐した娘は自分の味方（それも逆らえない、地味に）と恋仲になつてゐるし、やがては本人から来

てくれたけど自分の手に負えそうな次元の女じゃないし。

「何故、こんな事になった……?」
それが完全によくある負け犬の台詞などと、本人は気付きもしない。

裏戦争始まりの瞬間。

爆弾を抱えていることを暴露したヘイカは、姉と殿下に連行されていった。

なんか、色々と話し合う事があるらしい。生きて帰ってくるかなと私はその背中をぼんやりと見つめた。

「アカシエ。」

「ん？ なに、ネア。」

背中が消えていった方向をぼんやりと見つめたままネアは言った。

「陛下と、異国の茶髪の少女がいちゃついているという侍女達の話聞いてやってきたんだが・・・、どういふことか説明してくれるか？」

こちらを見ずとも背後に黒い何かが見えるつ。幻覚！？ いやっ、そんなことはない。

言わずにおこうとさっき決めただけだったのに、まさかのここで質問である。

この人も、爆弾、持ってた。私宛の。

しかしながらやましい事など何一つないのだから胸を張れ、私！

「いちゃついてないよ！ 私は廊下歩いてただけだよ！ そこにヘイカが嫌がらせしてきたんだよ！」

「嫌がらせ・・・では、嫌がらせであるなら何故「いちゃついている」という事になるんだ？」

「わわ私は悪くないよ、多分！ 改めてお姉ちゃんの好きな人聞く為にヘイカが勝手に壁に押し付けてきただけ！」

あの人変態だからね！ あの体勢に入る意味が全く理解出来なかったけど変態だから仕方ないのだろう！

「して？」

「ええつと、」

「いいよもう言っちゃえ。」

「かかか顔が近すぎて気持ち悪くて吐きました！」

しんとなった。そりやそうか？

下を向いたら、頭に体温。

「そうか、大丈夫だったか？ 陛下は変態だからな。吐いたの、苦しかったろ。」

最後の言葉に恥ずかしくなっただけで頬を染めたが、安心して首を縦に振った。

「もうね、生理的に無理すぎてどうしようかと思った！ 後ろは壁だし、前はヘイカの顔だし、しかも質問の度により一層近くなるんだよ！ 最後はもうこんなだった！」

安心したせいか調子に乗ってぺらぺらと状況を説明する私の口は止まらず、距離を表す為顔の前に手をかざした。

「・・・そんなに、近かったのか？」

「うん。横は何か手もあるし逃げられないしね！」

「それで？」

「今考えれば漫画だと口説く体勢なのに、残念だよね！」
相手と状況が。

調子に乗りすぎて笑顔でそう締めくくった私は、周りの温度が心なしか下がっているように思えたのにも気付かなかった。

はたと無言になったネアを見上げればそれはそれは不機嫌でして、彼の周りは吹雪のようでした。

おわり。

・・・であるはずもなく。

「・・・ひっ・・・!？」

「どうした？」

「何!？ 何で撫でるの!？」

首筋を。

手はゆっくりと上に上がり、顎から頬、鼻筋に額、瞼までくまなく撫でられた。

「何でだろうな？」

再び下がった手は、下ろしてあった髪の毛をふわりと持ち上げた。首、寒いですが。

気付いたら視界は夕日色の配色をした髪の毛で一杯で。

感覚で、首筋に唇が触れた事が分かってびくりとした。

「痛っ、」

ちくりとしたよ今！ 何をした？

なに、と瞳で訴えれば彼は唇のはしを僅かに上げて――

――「消毒だ。」

・・・ああ成る程ね！

ラウディの女を寄越せと要求してきた帝国。

話に聞くとところによると、巨大で強力な国である帝国の王は先代の賢王によって更にその威力を強めたが、突然の病に倒れ亡くなったその王の後を継いだのは王としては十分な政治的手腕の持ち主であるが、個人的に人として——特に女関係では——大変評判の悪い人物なんだそうだ。

「別に良いんじゃない？　王さまとしてやる事やってんなら。」

そう言った私の意見に、殿下と婚約してからは政治^{そうち}方面も猛勉強したらしい姉は、でもねえ、と口を開いた。

「確かに今まではそうだったんだけど、その悪い部分が政治にも顔を出してきたのよ。」

「そうなんだ。その証拠に、サハルエにも全く関係ないことを要求きたらしいしね。今まで、帝国とサハルエは殆ど交流が無かったはずだよ。」

そう言ったのは、殿下。

私は何故か今話し合いの席に参加・・・（させられ）中である。

ヘイカによるとどうやら、皇帝は古い古い文献で絶世の美貌を持つラウディ一族の存在と、それがサハルエ国にあるということ知った途端、興味を持ったらしく殆ど脅し文句で文書を寄越してきたらしい。

大臣達との会議で話し合っても断るに断れず、しかもラウディなど今はほぼ滅びたようなものなので要求を呑む訳にもいかず。（一瞬だけヘイカが女装していけば、という空気にもなったそうだ。一応ラウディだから。そんな無茶な。）

金髪の美しい娘を国から捜すが、文献でも詳しくラウディの情報を知っている皇帝が、身代わりの髪色しか一致しない娘であることなど直ぐに見破るだろう、と。

困り果てた状態に届いた情報が、ノウエル国次期国王の婚約話・・・

・と、その相手の事。

「だから頼む！　貴殿の婚約者を、どうか帝こ・・・」

「許す訳ないだろ。」
一蹴。

サハル工国に同情はするものの、そこまでお人好しではない私は自分たちで乗り切ってこちらまで巻き込むなよとは思ってしまう。

「うーん、だけど、そうだね。同盟しちゃったしなあ・・・しなきやよかった・・・。」

殿下、本音漏れてます。

「・・・もし戦争になったりしたら同盟国であるうちが援助しなきゃいけないるしね。」

仕方ない、協力の方向で父に相談してみるよ。」

「！ ほ、ほんとか！」

部屋の後ろの方で座っていた大臣たちにもざわめきが。

「だから・・・、練ようか。」

対帝国戦争回避作戦。」

おおお！ と盛り上がる室内で私は「ネーミングセンス無え・・・。」と心で呟き、

あくまで一歩引いた立場として眺めていた私は、思いもしなかったのである。

まさか、この作戦の要員に私も含まれるなどと！
完全に、巻き込まれ被害者だっ！

裏戦争始まりの瞬間。(後書き)

ネアもアカシエもヘイカに対する扱いが
さらつと酷い。

でも私は弄りやすく好きだよ、ヘイカ。頑張れ。

お腹周りは最も注意すべきだ。

帝国でパーティが開かれる事になったそうだ。

各国には招待状が届き、余程の事が無い限りほぼ全ての国が参加の意を表す。

最近同盟を結んだノウエル国とサハル工国も例外ではなく、ノウエル国からは次期国王とその妻が、サハル工国からは現国王が代表として赴く。

「という事ですが、そもそも今回のパティーンの意味をご存知ですかアカシエ様？ 帝国の慣わしとして毎回国王が―――。」
えーと。

「パティーンって何？ パーティーではなく？」

私の小声の指摘を丁寧な耳で拾い上げたふわふわの天使は一瞬で顔を赤くした。やかんが沸騰したようだ。

その反応で察して生暖かい視線を送りながら「カタカナ弱いんだね？」わざと再度指摘すると、「知ってます！」と涙声で返ってきた。
ああ可愛い。鼻から血が！

状況説明？ ああ、状況説明ですね了解パティーン。

現在、ノウエル国に居た時の私の天使、フィノルと、

馬車です。

「ちよつと待ってー！？　なんで私も帝国に行かなきゃいけないの！？　行くのは代表してお姉ちゃん達が・・・つぐわ！？　ちよ、きついきついきつい。コルセットどうしてそんなに閉めるの！？　肉が挟まる！　視界的に悲しい！」

半日程前――。

私は自室（というかサハル工滞在中に借りてる客用の部屋。広いよ。）にて皆おなじ服を着た侍女さん達に両腕を捕らわれ、強制的に着替えさせられていた。ドレス二度目。お腹が周りが一度目よりもきついのはどうしてだろうね。

よく思い出せば侍女さんみんな可愛かったな仕事出来るんだろうな給料高いんだろうなさすがお城の侍女！　超エリート！

・・・なんていう庶民の憧れ思考はしてないよ。本当だよ。

着替え中の為男子禁制なので部屋に居たお姉ちゃんだけが私の問いに答える唯一の相手である。

「言つたじゃない。私たちは『代表』よつて。他にも行くわよ。折角のパーティーだもの。」

「だからって何故私まで！　部外者！」

「あら？　忘れちゃったのシェイちゃん。その名もSKSを！」

SⅡ 戦争

KⅡ 回避

SⅡ 作戦

・・・安直！

心で顔を覆つた私を知るはずもない姉は、ぶちやつけ血の気多い。

むしろたつぷり。喧嘩ごと大好き。だから余計笑顔が晴れやかでした。

ああ、こつそり敵を倒す為に動くとかもうつきうきなんだろうね。尻尾あつたらぶんぶん振ってるだろうね。

遠い目になりはじめる妹に気付かない姉は、私の耳元のみでぼそりと呟いた。

「・・・大丈夫よ、シェイちゃんはパーティーの会場にはいかないから。」

「え？　ほんと？」

「ええ。各国要人の挨拶とかは私とラヴェンツ（とハゲル工王）とで引き受けるわ。その間に顔の知られていないシェイちゃん達は、裏で動いて欲しいの。」

「え・・・、うん。・・・『達』？」

「ノウエルに居た時の侍女のフィノル覚えてるかしら？　彼女、武術にも長けてるしその他色々の要因でシェイちゃんと一緒に行動して貰いたいって、ラヴェンツが・・・。嫌？」

「（私の）フィノル！！？　いいえ喜んで！」

この時頭には微塵もザッキンの事などありはしない。

より締め付けられたコルセットに肉が悲鳴をあげながら、ふと思っ

た。姉は私よりも重度のシスコンで、私を敵地に向かわせ参戦させるような危険な真似をさせるのか？

心の隅で疑問に思い、いつか寂しく「姉はいつか殿下を優先に思うのだろっ」と危惧した事が実現したのかと不安になった途端、

「うふふふふっ！　婚約パーティーの時には（誘拐されて）見れなかったシェイちゃんのドレスす・が・た！　やっと見れたわー！　ナイスなことするじゃない、帝国も！　いい機会！」

・・・答えは案外俗っぽい理由だった。

少し安心したのは秘密である。

私も姉離れしなければなあ。

「・・・え、待って待って。それで私はどうして今ドレス着てるの？ お姉ちゃん達とかも皆は普通明日に出発するって言って・・・た・・・？」

さつと血の気が引いて、

「・・・まさか・・・。」

「うふっ？」

姉のちよつと気持ち悪い笑い方を目に最後に、私は到頭エリート侍女さん（お城付きだから）に最後の一手を攻められ、お腹の苦しさで意識が飛んで・・・、

で。

「目覚めたら馬車っていうね・・・。お陰で背中とお尻が痛いわ・・・。」

「その内慣れますよ、アカシエ様。」

笑ったフィノルに癒される。ああもう可愛い。

「—————それで。」

声が潜められ、少し尖っていた。これが、たぶん、武人のフィノル。

「ドレスの質でお分かりかと思いますが、今私が身に着けてるドレスは質・見た目共にアカシエ様より上の者であると強調するように作られたものです。」

「と、いう事は・・・？」

「アカシエ様はリアーナ様の唯一のご身内。王族の血はなくとも、王族でございます。」

え、そうなの？（今頃）

「何かあった時にもアカシエ様はあくまでただの侍女であり、無関係であり無害であるとし、危険回避の為、今回帝国内では一時とはいえ失礼ながら私がアカシエ様の上の者として振舞わせて頂きます。」

「分かった。私、作法とか侍女の振る舞いとか分からないんだけど・・・。」

「大丈夫です。公の場合へは行きません。もしも誰かに遭遇した時は、声を発さず、余り相手の顔を見ず、私の数歩ほど後ろで立っていて頂ければそれだけで十分です。相手は騙せます。」

「パティーン。」

「・・・う・・・、えっと、アカシエ様は今回の作戦の裏内容をご存知ですよね？」

「うん、ご存知ではありません。」

「・・・今回裏では皇帝が私を慕うように仕向けます。つまりは囷役です。私が皇帝と接触している間、アカシエ様は迷った振りをして城内を完全に把握して頂きたい。そして、出来れば帝国の皇帝補佐（宰相）にこの文書をお渡し下さい。相手に接触せずに渡す方法が望ましいです。」

「・・・うん。分かった。」

「申し訳ありません。宜しくお願い致します。」

囷役って事にも少し疑問を覚えたけれども。

何で、私がこんな重要な裏方任務を任せられたか分かった。

お姉ちゃんは今期王妃。

ヘイカは（仮にも）国王。

殿下は、本当に使える者は全て使っらしい。恐らく姉は私が囃役であることを知らない。

確かに、目立たず動くには私が的確である。

『迷った振りをして城内を把握――』

一町ほどある様な城を、地図なしの上短時間短期間で覚えられる者はそう居ない。

完璧ではない突然変異だが、私はラウディである。その程度の記憶の保管が出来ないはずが無かった。

任されたんなら、完璧にやってやろうじゃないの。

「ね、ねえ、フィノル。」

「はい？」

「ところで帝国はまだ？」

「まだ数時間以上は掛かるかと……。どうされました？」

「コルセット緩めちゃだめ？」

「……。」

か、完璧にやってやろうじゃないのパティーン！

腹洗って待っててね帝国！

お腹周りは最も注意すべきだ。(後書き)

パーティーに出たら沢山美味しいものが食べられ飲めることにアカシエは気付いていない。
言わないでおいであげよう。。

やらなくちゃいけないこと、誰の為に？（前書き）

お久しぶりです。

やらなくちゃいけないこと、誰の為に？

帝国のお城に着いたら本当に私は黙って下を向いて歩いているだけで客室に案内されてしまった。

部屋では誰に聞かれているかも分からないから、フィノルと筆談する。

『アカシエさま、城内の把握をお願い致します。』

『了解。フィノルも気をつけてね？』

部屋を出てふと思いついた。一度思いつくと、私が感じていた疑問とか、違和感も考えざるを得ない。

私に城内を把握させて、殿下は一体どうするのだろうか。

たぶん、後々地図とかにさせて有効活用か、直接私にどこか案内をさせるとか、悪巧みには違いない。

殿下は一国の王になる者だから、国の危機を回避、とか利用出来るものを利用するのは正しい判断だと思う。

でも何となく私は、殿下に大切にされている姉が居て、その姉の妹だから不当に扱われることはないのだろうと無条件で思い込んでしまっていたのだ。

姉が愛しているのは殿下で、でも一番大切なのは私だという事を私は知っている。

多分殿下も理解している。姉本人は気づいていないだろうと思う。だから、そのまま殿下が愛している姉が大切にしている妹を、殿下が不当に扱うことはないだろう、と。

自惚れていた？ 自身は安全で大丈夫だと？

（・・・甘かったな！。）

自分が姉にとつて（本人はおもっていないくとも）邪魔な存在だといふところにシヨックを受ける。

私は、あのまま姉を盾に城に居続けて、その後どうするつもりだったんだろう。

姉が望んだことでわたしはノウエル城に滞在していたけど、本当は姉が泣こうが怒ろうが発狂しようが、城下のもとの家に一人で戻るべきだったのではないか。例え、城の中の方が安全だとしても。

それが自分の為にも、姉の為にも、殿下の為・・・国の為にもなっただろう。

私も今回まさかの敵国（一応）に入って、仕事を押し付けられた事に違和感を感じていた。

私に城内把握の仕事を押し付けた理由は納得の人選だったけど、違う側面から見れば全然納得は出来ない。

殿下はリスクを犯している。

そして、殿下のリスクは即ち国のリスクだ。

殿下がそのリスクに気づいていない可能性は極めて低いから、恐らく承知でやっている。

私という人選そのものがリスクだ。姉という存在とノウエルが故郷である事からして、裏切りの面でのリスクは皆無だけれども、もし私が危険に遭った場合。

姉は間違いないで殿下を責めるだろう。

最悪の結果、つまりは万が一私が死にでもしたら、姉がその後殿下と共に生きる事はまずないだろう。

加えて復讐もするだろう。一人で国に歯向かいもするかもしれない。敵国の城で画策だなんて、かなりの危険だ。

私も作戦に参加することを、姉は殿下を信用して承知したのだ（本人の意思は無かったけれども）。その信用の裏切りを、姉は許さないだろう。

怒って復讐する。そしてこれでもかという程自分も責める。殿下と自分をとことん憎んで憎んで憎んで、

・・・心で泣くと思う。

殿下への愛と私の大切さで板ばさみになったら、姉がどうなるかなんて想像したくもない。

殿下は間違いなく姉を愛している。国からの立場で私を指名して、その結果姉と仲たがいましたら、どの位かは分からないけれども、多少なりとも揺れると思う。不安定に。

トップの揺れは全体の揺れだから、国の危機になる可能性もある。・・・そこまで推測して考えて、血の気が引いて、ふと昔の事を思い出した。

『どうしてアカシエちゃんは、そんなに、自分がお姉ちゃんに大切にされているって分かるの?』

近所に住んでいた子達で、隠れおにをしていた時だったか。当時仲の良かった子に質問されたことがある。

遊びには姉も参加していて、私はその子と草陰に隠れていたのだ。見つかったらどうしよう、ねえ、一緒に走って逃げようね、アカシエちゃん。

小声で話しかけられる度に私は何も心配していない状態で、うん、大丈夫だよ、と答えた。余りに私が平然としているので、その子は怪訝な表情になって聞いてきた。

『見つかるの怖くないの、アカシエちゃん?』

確か笑顔でぜんぜん? と答えた。どうして、と再び聞いてくるのでやはり私は同じ笑顔で当たり前のように言ったのだ。

『だって、私は見つかったら確かに走るけど、でも、捕まりそうになったら、お姉ちゃんが助けてくれるもん。私がお姉ちゃんを大好きなように、お姉ちゃんも同じくらい私のこと大切にしてくれるから。』

するとその子は最初のように尋ねたのだ。『どうして分かるの？』

私にとって、姉が私を一番大切にしてくれていることは昔からの不変の事実で、周知だった。

大きくなっても、そこだけは何も疑わなくらいに姉が私を大切にしてくれたから。私がそれを理解していたから。

その分、私は姉に大切にされなくなる事が一番怖いんだけど。でも、言葉を返せるように、人は気持ちも返せる生き物だから、大切にされるだけではなく私も同じように姉が大切だ。

だから、推測したような結末には絶対になってはいけない。なりたくない。

つまり、私は絶対に無事でいなければいけない。自惚れでなく、自分の為でもなく、誰よりも姉の為に。

だから私は、城内を把握し、そして自分の身を守る。

（・・・よし。やらなきゃいけない事が分かったから、動きやすい。案内図とかないかな。あつたら楽だけど、あるはずないよね・・・。怪しまれないように、少しずつ確実に城内を歩いて見回ろう。）

頭の中でこの便利な能力を使いながら地図を作っていく。

（・・・よしっ！ いけるいける！ なんか能力を使ったら、思い出す【記憶】も多いけど、楽勝じゃないの！ ふはははは！ さすが私、さあ、かかってこい、敵！）

とか調子に乗ってたら。

「おいその者！ 何をしている！ 早く出て行け！」

気づいたら知らない所に居た。え、やばい？ もしかしてここ来ちゃいけなかった！？

「ももも申し訳ありません！」、慌てて顔を伏せて謝ると、相手は私の言葉を聞いてなかったように流して続きを叫んだ。

「ここは男子便所だ！」

うそーん。

地図に入れておきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2603n/>

次期国王花嫁候補の超絶美形な姉を持った極平凡な妹の巻き込まれ話。

2011年11月13日18時05分発行